
ARMORED CORE2 ANOTHER AGE - A・I・N -

オオガラス

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ARMORED CORE 2 ANOTHER AGE - A・I・N -

【Nコード】

N7562Y

【作者名】

オオガラス

【あらすじ】

一人のレイヴンの元に、一つの依頼が舞い込む、
「貴方にお願ひがあります」
オペレーターの冷たい声に、男は軽く溜息を吐いた。

- Mission 1 - 長い一日(前書き)

書き方が特殊なので見辛いかもしれません。
それでもご覧頂ける方には感謝を。

- Mission 1 - 長い一日

- : : 雨が降っていた 空を覆うのは 灰色の雲……

雨が降っていた

降り止む気配は無い

外を見る 辺りは一面の砂

興味を引くような物は何も無い

目を閉じる 雨音が聞こえる

その音に耳を傾ける

一定のリズムで 雨は機体を打つ

そのリズムが心地良い

時刻 14:30 天候 雨

漆黒に彩られた機体の腹の中

操縦席のシートに 深く身を沈める

聞こえてくるのは水の音

目に見えるのは 崩れ埋もれたガレキだけ

” ザーム砂漠 ”

昔は都市であったであろう面影だけを残し

今は 砂と石に覆われた世界

辺りに人の姿は無い

人間はこの土地を捨てた 用無しと言わんばかりに

そして 西に新たな楽園を求めた 人の住む都市

” ネオ・アイザック ”

新たに創られた人の巢は そう呼ばれている

ネオ・アイザックに向かおうとしているヤツがいる

そいつを口説いて落す これが今回の依頼

あまりにも衣装が派手なので 都市には入れたくないらしい

ヒドイ話だ…

この砂漠のど真ん中 既に1時間以上待っている

約束の相手は まだ 来ない …

小さく電子音が響く 味気の無いコールサイン

『大丈夫ですか？』

それに続いて女性の声 その声もまた 味気無い

モニターに映った彼女が 切れ長の目で見つめてくる

だがその瞳は 何処か虚ろで無機質

それを隠すかのように掛けられた 縁無しメガネ

流れるように顔に掛かった綺麗な黒髪を

彼女は鬱陶しそうに横に撫で付けた

ついでそのまま 軽くメガネを押し上げる

彼女の容姿は上の部類だと思ふ まさに冷艶

だが 全体的にキツイ 冷淡な印象を受ける

その理由は 多分これだ 彼女には表情が無い

彼女の顔に 感情が浮かんだ所など一度も見た事が無い

笑顔なんて見たことすら無い 泣き顔なんて論外だ

それはまるで 生身の女性と言うより 綺麗な彫像

そんな 美しくも素っ気無い顔を眺めながら 思考の中へと埋没していく

彼女は言った 『今回のミッションだけは お手伝い致します』と

何故？ 真剣に悩んでしまう 事あるごとに邪魔ばかりするくせに

今まで役に立った事なんて 数える程も無いくせに 何故…？

……と言つかこの女 本当にオペレーターなのか？

『大丈夫ですか？』

再度 同じ問い掛け 聞こえていないと思っただらしい

「…聞こえてるよ…ニーナ」

【ニーナ】

それがこの オペレーターとは名ばかりの女の名前

彼女は 『そうですか』 と言った後で

『でしたら』 と 続けた

『答えて下さい 大丈夫ですか？』

それに 一拍置いて答える

「……………何が？」

二ーナが溜息を一つ 小さく漏らした

彼女は感情を 表情に出す事はまず無い

だが 雰囲気と瞳に如実に現れるのを知っている

今がまさにそう まるで馬鹿を見るような目を向けてくる

冷たい印象が 更に冷たさを増してくるのがモニター越しに分かる

『準備は出来ているのかと聞いているのです』

苛立たしげに彼女は言う だからこう答える

「見ての通り」

『解りません』

「……………残念」

二ーナを無視して 今回の依頼をもう一度 頭の中で整理してみる
まず どうかのバカが 何に使うのかは知らないが

大型の移動兵器を開発していたらしい

その大型移動兵器を 製造途中に別のヤツが破壊した

……しかし 再起不能 とまではいかなかった

お陰でこうして 初めてのオツカイが出来るまでに回復した

その行き先は ” ネオ・アイザック ”

買い物にしてはちょっと大袈裟すぎる

止めたいと思うのは まあ 当然だろう

「仕事は最後までやるもんだろ……」

破壊し損ねたどっかのレイヴンへ 文句と舌打ちを送る

『大型移動兵器の事ですか？』

独り言が聞こえたらしい

「……ああ」

曖昧に頷く 確かに間違っではないが 正しくも無い

でも訂正するのも面倒で 彼女の問に 適当な相槌を返す

『今回の目標について なにか質問が？』

やはり無表情だった 動くのは 瞳を覆う瞼の その瞬き位のもの

彼女と会話していると 機械か何かと会話している錯覚に陥る

「いや……」

質問 と言われても ココに来る途中で一通り聞いてある

今更 聞く事なんて無いが……

「そつだな もう一度確認だ」

彼女は俯くと 目の前のコンソールでも弄っているのか

何かを打ち込んでいるような 小気味良いリズムが聞こえてきた

『どつぞ』

彼女が顔を上げる 質問を待っていた

頷いて 「それじゃ」と言っ続けてける

「目標の名前は？」

『グレイ・クラウド』

「大きさは？」

『詳細なデータはありません が ACの軽く3倍以上はあると思われます』

「…それで” Gray Cloud (灰色の雲)” ね」
思わず空を仰ぎ見る

『他には何か?』

彼女の声に 視線を戻す 口元に手を置いて考える

「そうだな……」

目標の獲物を再確認してみよう 何せ相手のセンスは最悪だ

仮装パーティーにでも呼ばれたかと疑いたくなる程派手な衣装

「ソイツの武装について」

彼女は再度 コンソールを操作する

普段は虚無を映しているその瞳に

今は 様々なデータが映り込んでいた

『製造途中のデータしかありませんが 宜しいですね?』

顔を上げて彼女は問う それしか無いんじゃない仕方が無い

「ああ」 一つ頷いてみせる 彼女は続けた

『まずは 両腕からはグレネード弾 連射が可能です

次に エクステンションからは エネルギー系のマシンガン

更に本体上部 左右に8連ミサイルポット

最後に 目標本体から小型自律兵器の射出が可能 以上です』

モニターに映った情報を ニーナは一気に読み上げた

そして彼女は顔を上げる 同時に 彼女へ両手を上げてみせた

「ご立派 とても普通の兵器じゃ太刀打ちできないな」

呆れた笑いが込み上げる 連射が可能なグレネード弾？

祝砲にしちゃ賑やか過ぎだろ 花火にしても五月蠅過ぎる

それに加えてENマシンガン ミサイル ビット……

まったく オツカイじゃなくて 兵器の押し売りにでも行くつもりか？

仮装パーティーにしたって派手過ぎる 他の客が目を回すぞ

そんなんじゃ 門前で追い返されるのが関の山だ

『……………ああ だからココに居るのか』

黒服姿で待ってる理由を 改めて納得した

次いで 無表情の仮面をつけた女が言う

『その通りです ところで……』

三度コンソールを弄る 唐突に深い溜息

『今回も その機体で出るつもりですか？』

『ん？ 何か問題でも？』

どうやら彼女は 今回もお召し物が気に入らないらしい

『武器はブレードだけ ですか……』

『素手よりは マシだろ？』

肩を竦めて答えてやる 軽口を添えながら

A Cのアセンブルは パーツの数と人の数だけ存在する

武器だって ライフル マシガン バズーカ ミサイル e t c
e t c

使う戦術・兵装 そのスタイルによって 呼称も様々用意されている
銃をメインで使うならガンナー ミサイルが大好物ならミサイラー
と言つ場合にも

強力なものから連射の効くモノまで どれを使うかはレイヴンによ
つて様々だ

……それだけ武器があるにも関わらず　いつも使うお気に入りはただ一つ

左腕にブレードだけ　後はせいぜいリーダー位　他は何も積まない

彼女はいたく　それが気に入らないらしい

でも　このスタイルだけは譲れない

イカレてると言われても　馬鹿だと蔑まれても

あの人に近づいたためなら　なんでもやる

あの人みたいに　強くなれるなら……

だから仕事はこの機体で出る　これでも何とかなる

もし出来なくとも　何とかする　それが　レイヴン

【レイヴン】

企業や政府に雇われる者を　こつ呼ぶ　要するに　傭兵

金さえ貰えればなんでもやる　仕事は確実に　こなす

それが出来なければ　死ぬだけ

『無茶ですね』

唐突に 遠慮も無くニーナは言う

瞳には いつも通りの無言の罵倒

「無理じゃあないさ」

彼女は諦めにも似た溜息を吐き 首を小さく横に振る

それっきり ニーナは黙ってしまった

沈黙の重圧がコクピットの中を覆う

青白い人工の光に照らされたニーナの顔を呆と眺め

……ふと そこでさっきまで考えていた事を思い出す

何故 今回に限って これだけ彼女は協力的なのか？

心配だから？ 死ぬかもしれないから？

有り得ない それは確実に 有り得ない

今までの仕事を思い出す 思わず身震い

あれはいつの事だったか 彼女は言った『敵機残り3機です』

それがどうだ 増えるわ増えるわ敵援軍16機

「どう言う事だ?!」 慌てふためきながら問い質した事があった

その時ニーナは何て言った？ その答えは至って簡素なものだったろ

『忘れてました』 たった一言 次に 『頑張ってください』 以上
終わり

何とか全機撃破 デイスプレイを殴りつけながら彼女を呼んだのを
覚えてる

あの時のあの表情 そしてあの言葉 あれは絶対本気だった 断言
できる

彼女はいつもの無機質な 虚無的な目で たった一言

『生きてらしたんですか』

あの時ほど ニーナに殺意を覚えた事は無い ついでに恐怖も……

それに…そうだ あれだってそうだ 他のレイヴンとの共同作戦

もう1人来るからと デートの待ち合わせしてた時の事だ

突然 上から横から3機のACが飛び込んできた

驚きながら彼女に聞いたよな 「どいつが味方だ?!」 って

そしたら彼女はまたしても たった一言 『さあ?』

「フザケるな！」 怒鳴ろうとしたら 戦闘開始

それも 3機同時の多人数プレイ 味方なんていやしなかった

……あれは……へヴィだった……

それが今までの彼女の所業 下手したら100回以上は死んでいる

それ程までに 彼女のよこす情報はヤバイ 正確性の欠片すらない

……欠片くらい 有っても良いんじゃないかな……？

それがどうだ？ 今回に限っては正確 いや 正確過ぎる

確かに 大抵の事は依頼主である監督局から聞いてある

しかし それは最低限の事だけだ ヤツがネオ・アイザックに向かっている

通常の兵器ではまるで歯が立たない だからレイヴンに頼む これだけだ

グレイ・クラウドの武装についても ニーナから聞かされた

ヤツの武装データなど極秘中の極秘の筈 それを何故？ どうやって？

製造途中なんて言うてはいるが それにしたって完璧すぎる

ニーナの顔をマジマジと見ながら 意を決して問い質す

モニターの向こう 光を反射しながら 彼女の瞳が青く揺らめいていた

「……一つ 聞いても良いか？」

『却下します』

即答 思わず頭を抱える

相変わらず取り付く島も無い

溜息を吐きながら それでも彼女の瞳を見つめる

今回は本気だ と言う事を 言外に伝えてやる

『解りました』

ニーナは目を伏せると 小さく吐息

珍しく 彼女が折れた

『それで 何をお聞きになりたいと？』

「ああ」 言った後 生唾を飲む 彼女とこう言う会話をすると

どうもプレッシャーを掛けられているような気がしてならない

「……なんで今回に限って これほど協力的なのか」

その間に 不意に彼女の瞳の色が変わる

この男は 何を言っているんだ？ そんな感じに

『オペレーターですから 当然の事では?』

「どの口で言ってるんだよ!」

思わずディスプレイを叩きながら 怒鳴り声を上げてしまう
と言つか コイツにオペレーターの自覚があったなんて……

その怒声にも やはり彼女は表情を変えない

「それで? 本当の所は?」

息を吐く まあ 感情が解らないのも 表情が読めないのも
言ってしまうばいつもの事だ 今更気にしたって仕方が無い

「……言えない?」

目の前のコンソールに腕を乗せ モニターに顔を近づける

見つめ合うこと数秒 甘さには程遠い時間の後

『 ……いえ 解りました お答えします』

目を瞑る 開ける そしてニーナは口を開いた

『貴方の事が……』

そこで彼女の言葉に割り込んで喋る ンな訳あるか

「心配ですから　なんて答えは無しだ」

小さく舌打ちが聞こえた　表情は変わらずに

「…………お前なあ…………」

怒りを通り過ぎて　思わずガツクリと肩を落す

『…………… 解りました　正直に言います』

大きな溜息　今度は正真正銘　観念した　そんな雰囲気を漂わせる

勝った　仕事が始まる前なのに　そんな充足感で一杯だった

「ああ　頼む」

緩みそうな顔を必死に堪えながら促す

それを見て　ニーナは訝しげな表情を浮かべる

次いで　何を馬鹿な事を考えて……………そんな目をしていた

素知らぬ顔でやり過す　「で？」　と彼女に話しを促す

『アレは害悪です』

彼女の顔から　それこそ一切の表情が消える

一点を見つめる瞳は　何処か別な場所を見つめているような

様子の変わった彼女から発せられた言葉は やはり変わっていた
それは全く意味不明 思わず眉を顰め 首を傾げながら問い返す
「害悪？」

害？ 妨げ 支障 災 物事の妨げとなるような悪い事

頭の中で その単語の一般的な意味を思い浮かべる

いや 確かにアレは ネオ・アイザックにとっての脅威だろう

害になると言うのは解る でも しかし……

「…………それは 誰の？」

彼女がまさか 都市の人間の事を心配するとは思えない

いや それは流石に言い過ぎだろうか？ もしかしたら優しい心も

……

『決っているでしょう？ 我々のです』

さも当然 と言わんばかりの表情を浮かべながら ニーナは言った
意味が分からない 我々？ 自分達と言う意味か？ ニーナも含め
て？

「我々ってのは？ 都市の人間？ それとも 企業？」

彼女が一瞬 視線を外した すぐに戻す

それは隠し事や 言い辛い そんな感じじゃない

何だ？ 探るような視線を向ける それを彼女は躲す

『それは 勿論 』

一拍溜めて彼女は続けた 次の言葉を待ち受ける

…だが 残念ながら その時は来なかった

突然のサイレン 甲高い警告音

コックピットの中で喧しい音が響き渡る

続いて別の女性の声

【テキ セツキン キケン キケン キケン】

機体の頭部 そこに備えられたAIからの警報

目の前のオペレーターよりも よっぽど頼りになる彼女が叫んだ

『どうやら お喋りはここまでのようですね』

二ーナの言葉に 皮肉を込めて鼻を鳴らす

どうせ敵が来る事を知っていたんだろう

さっき目を逸らしたのは レーダーを見るため

オペレーター側のレーダーは 索敵範囲がACのそれよりも広い
敵の挙動をいち早く知る事が出来る

ニーナより そのレーダーだけ欲しいよな……

「……仕方ない」

今日 何度目かの溜息 まあ どちらにせよ

そんな高望みを言ったって それこそ 仕方が無い……

……せめてオペレーター 変えてもらう事 出来ないのかな？

『では 無事に帰還できるよう 祈ります』

そんな嘆きの思考に割り込むように 彼女は無表情でそう言った

「お前が？ 誰に祈るんだ？」

そう問い掛けようとして 止めた

別に他人が何を信仰していたって構わないと思っている

だから それはどうでも良いと 問うのを止めた

他に聞きたい事は山ほどある さっさとお客を片づけよう

色々聞くのは それからでも遅くは無い

喋るかどつかは別として だが……

オペレーターの冷たい声が消える

入れ替わりに ノイズ交じりの女性の声が 耳元で囁く

【システム キドウ】

戦闘の合図 戦いが 始まる

- Mission 1 - 長い一日（後書き）

かなり前に書いていた小説です、直しと復習を兼ねて投稿させて頂きました。

ご覧のとおり句読点などを省いているので見辛いかと思います、それでも読んで下さった方、ありがとうございます。

話数が結構ありますので、時間がある時に上げていききたいと思います。

- Mission 1 - 灰色の雲

低い唸り声が聞こえる 姿はまだ無い

音が聞こえる 音だけが聞こえていた

ACのブースターにも似たような音

距離はまだあるようだが……いや 見えた

まだ待ち合わせ場所には遠い

それでもあの大きさか……

「ヤツとの距離は？」

ニーナに向かって距離を問う そして …

『距離 1500』

後悔する

「……1500……それであのデカさ……」

あまりの事に レバーを握る手が汗ばむ

それが 徐々にコチラに向かってやって来る

「ニーナ 距離を報告 2000ずつ」

顔は上空を向け 目だけニーナに向ける

それに 伏目がちに彼女は応じた

『解りました 距離1000』

いや 徐々に なんて速さじゃない

「おいおい……」

グレイクラウド 彼女は脚が自慢らしい

『距離 800』

速度が異常 それも 予想以上

『距離600』

「ニーナ…もう良い…」

聞かなくても解る 目の前にいるのだから

思わず笑い声が漏れる 何だ…これ…

「ACの3倍？ これで？」

目前に迫るソレは ニーナの情報より遥かにデカかった

3倍なんて可愛いもんじゃない 控えめに見ても4倍

いや 軽く5倍以上はあるぞ……また 騙されたか？

頭を過ぎる チラツとニーナに目をやる 彼女と目が合う

苦笑いを浮かべる いや と頭を軽く振る それは無いか

まあ 3倍でも5倍でも コツチよりデカイのに変わり無い

ヤツはコチラの頭上を無視するように通り過ぎ 先へと進む

デートをするにも相手が悪い このお嬢様では高望みが過ぎる

いつその事 このまま 『またね』で 帰ってくれないかな……

空しい希望を抱いてみる 当然 その望みは叶えてもらえなかった

彼女はコチラに駆け寄ってくる 遠慮したい……ダメ……？

『…… だったら 落ちるまで付き合いますよ……』

溜息一つ 覚悟を 決める

「ニーナ ヤツとの距離を」

『はい 距離900』

900……思わず自分の両手を眺める

攻撃はまず届かない 当然か

通常の武器でもそれは同じ事

届くとしたら それはスナイパーライフル位のもの

それに反して コチラの手持ちはブレードのみ

少しばかりの後悔

ニーナの瞳に非難の色が混じる 『それ見た事か』 と

苦笑い一つ 目線を上げる お嬢様を見上げて考える

「さて どう口説くか……」

瞬間 突然の破砕音 何かが弾けたような音

眉をひそめる 目を凝らす 数個の輝きが瞬く

更に数度 奇妙な音は続く もう一度 目を凝らす

光りの塊 白煙の束 あれって……

「 ヤバッ……! 」

気付くのが遅れた いや むしろ考えたくなかった

さっき聞いた ニーナの説明を思い出す

『本体上部 左右に8連ミサイルポット』

左右8発 計16発のミサイルの束

それがコチラを指して突っ込んでくる

回避 頭に浮かぶ バカを言え

ヤツの持ち手は一つじゃない

もし全弾回避しても次が来る

舌打ち一つ ミサイルが間近に迫る 盾を探す

視線の先 前方に背の高いビル その残骸

両手のレバーを前に倒す 機体が前進する

ペダルを踏み込む ジェネレータが唸りを上げる

ブースターにエネルギーが送られる 火が入る

機体が前進 1歩 2歩 そのままブーストダッシュ

目を付けた残骸まで一気に駆ける

「間に合う……か!？」

目前に迫る無数のミサイル

一発 二発 三発

機体のすぐ脇を掠める

通り過ぎて後方で爆発

それを確認 一瞬目を離す

「ッ！」

目を見開く 思わず言葉を失う

四発目 それが目の前に迫る なんて迂闊

「クソッ！」

舌を打つ 咄嗟に両手のレバーを左斜め前に倒す

機体はその動きをトレースする 左斜め前に走る

頭部の右側 目の横辺りを掠める ギリギリで回避

「なッ?!」

4発目の斜め後ろに…… 5発目!?

この間合い……これは躲し切れない ッ!

?死?

不吉な単語が頭をよぎる

ダメか 諦めの言葉が脳裏に浮かぶ

だが 突然コア本体から低い呻き声が響く

次いで 青い光がコアから放出 そしてミサイルを撃つ

コアに内臓されたミサイル迎撃システム 思わず拳を握る

ミサイルが機体に被弾する その直前で爆ぜる

爆風を掻き分けながらビルの残骸 その陰に滑り込む

直後 立て続けにミサイルがビルに被弾 爆風が舞う

ビルが軋みを上げながら揺れる 長くはもたないか

唯の石の残骸が あれだけのミサイルの雨を食らって耐えられる筈
が無い

素早く視線を巡らす 更に前方のビル ブーストを全開にしてその
陰に飛び込む

その直後 後方で ビルの残骸の崩れる音がした

グレイ・クラウドは いつの間にか頭上 真上にいた

当たり前だが 自分の真下にまではロック出来ないらしい
少しホツとする 深く息を吸い込み 大きく息を吐く
とりあえずの休息 体勢と息を整える 気が緩む

『 …… 馬鹿 』

小さくニーナが呟いた

それは彼女の静かな警告

ハツとする が 遅かった

『 !? 』

奇妙な機械音 続いて閉じられた複数の瞳

一瞬 思考と時が止まる 甘かった……

「 小型自律兵器……?! 」

叫ぶと同時にその瞳が開いた そして針が飛ぶ

いや 針のように細かい 無数のレーザー

声にならない悲鳴を上げながら 必死にペダルを踏み込む

ブーストダツシュ 向かう目標など決めていなかった

ただ あの群れから逃げ出すためだけに走らせる

後方を見る ビットの姿が消えていた 前方に視線を戻す

「早いッ！！？」

目を見開く 既に目の前に回り込んでいる いつの間！？

迷わず両方のレバーを右に倒す そしてペダルを踏み込む

ジェネレータが勢いを増す ブースターが火を噴き加速する

瞳の脇を抜ける 足元でレーザーが弾ける 敵の反応が早い

機体の後ろにへばり付かれている

「シッコイんだよ！！！」

叫びながら急停止 そして前方を向いたままバックダッシュ

虚を衝かれたビットは動きを止める

このまま逃げ切って……

「……え？」

重い音が響く 機体が動きを止める 頭の中が白くなる

ニーナが溜息をついた 恐る恐る背後に視線を巡らす

「しま……ッ」

背後にはビル その残骸 機体を優しく抱き止めていた

そして足元に影が生まれる 砂漠の砂に無数の影

今度も 恐る恐る仰ぎ見る そして奴等と目が合った

2度目のシャワー 機体も悲鳴を上げる

歯を食い縛りながらペダルを踏み込む

何度目かのブーストダッシュ 逃げる逃げる

かなりヘヴィな鬼ごっこ 捕まったらそこでオシマイ

後ろも見ずに滅茶苦茶に走る 暫くして あれ……？

思わず立ち止まる 鬼がその役割を放棄したのか追って来ない

後ろを振り向く 小さな爆発 それが連続して起こった

それは唐突な終了 ビットの稼動時間が切れたらしい

今のうちとばかりに 手近な建物の その陰に身を隠す

暗がりの中で 唯一煌々とするモニターに目を向ける

機体の破損率50% 半分持ってかれたか 唇が歪む

「
…十分だ」

まだ
戦える
…

- Mission 1 - 存在しない選択肢

予想以上に激しいデート

コチラの身にもなって欲しい

まずは2枚 彼女の手札は見せてもらった

……どちらとも 出来れば2度と見たくない

あと2枚 EN系のマシンガンとグレネード

「出来ればこのまま スタンド（おあずけ）をお願いしたいな……」

『サレンダー（降りる）は勿論無しです』

珍しい ニーナが合わせてくれるなんて

「解ってるぞ……」

彼女の言葉に溜息混じりで応えを返す

状況はあまり良くはない いや かなり悪い

それじゃ と 今の手持ちのカードを確かめる

「……手？ 何を今更」

鼻で笑い 目を向ける 左腕のスペードのA

これが唯一の武器であり 最後の切り札

まずは お嬢様とお近付きになりたい

建物の陰からヤツの姿を確認する

遙か彼方でゆっくりと 旋回を始めていた

それを眺めながら 思わず呟く

「どうしようか……」

それを聞いて ニーナは言った

『迷う必要がありますか？ 貴方の手札は2枚だけでしょうに』

「……………だよな」

まあ 結局の所 使える手札なんて限られている

「それじゃあディーラー カードをよこせ 1枚目は何だ？」

ニーナの雰囲気が一瞬 険しい色を帯びる

「どうせなら 最後までつき合え」 と それを宥める

彼女は諦めたように溜息を吐いて 言葉に合わせた

『 : Overd Boost 』

正解 だが それじゃ足りない

拳で軽く コンソールを2度叩く

「ヒットだ もう1枚追加」

呆れたように 彼女は目を閉じる

『 リミット・カット 』

そう この2枚 そして右手のブレード ” MOONLIGHT ”

「 ついでにさ もう2枚だけ 追加しないか? 」

ニーナの目が 訝しむように細められる

『 欲を張りますね バーストする気ですか? 』

「 まだ余裕はあるさ 」

ニーナは軽く 首を傾げた

『 そのカードは? 』

「 愛と勇気 」

数秒間 ジッとニーナに見つめられる

『随分と儂い手札ですね』

「時には鋼よりも強靱になる」

『現実を見たらどうですか？』

相変わらず言葉がキツイ 思わず肩を竦める

「……まったく お前には夢が足りないよ」

『女ですから』

「……お前だけだろ」

「さて どうするかな……」

そろそろニーナの言う ”現実” を見るとしよ

使う手札は決まった ? O・B? と? リミット・カット?

【Overd Boost】

略して ? O・B?

莫大なエネルギーと引き換えに

冗談みたいな速度を提供してくれるブースター

そして 【リミット・カット】

一時的にジェネレータの限界を毀す事で

エネルギーの限界を無くしてしまう

確かにこの2つを合わせて使えば 或いは …

しかし 失敗した時のリスクも デカイ

リミット・カットの唯一にして甚大なリスク

数十秒 エネルギーの供給が不可能になる

つまりコチラは 何も出来なくなる

暫しの逡巡 本当にやれるか迷う

1分 2分 3分 だが 考える時間はあまり無かった

状況が…と言うより 彼女がそれを許してくれなかった

二丁ナの瞳に 苛立たしげな感情の色が浮ぶ

「 …まあ 他に方法は無い…か」

彼女に向けて苦笑と 両手を上げて見せる

では 何処で? どのようにして?

思わず ニーナに目で問いかけていた

それに彼女は瞳で答えた 『自分で考える』 と

「……はいはい」

瞳で語りあえるなんて 付き合いも長くなったもんだ

『まだ何も言っていないませんか?』

「嘘つけ」

『罪業妄想ですか?』

「何だそりゃ」

今日は珍しい事だらけだ こんな軽口を叩き合うなんて

「それなら どうする?」

『自分で考えて下さい』

「お前なあ……」

『貴方の仕事でしょう?』

ごもつとも それを言われたら 返す言葉も無い

「解ったよ……」

もう一度 溜息混じりに肩を竦める

そして 「だったら」 と続ける

「だったら 参考までに聞かせてくれ お前ならどう攻める？」

参考と言っておきながら これは単なる興味に過ぎない

第一 オペレーターに聞いたって 解決する筈も無い

『男らしく 正面から行きます』

あの弾幕の中を？ 正面から？ 正気か？

ニーナの顔をマジマジと見る

彼女が何を言ってるかは解る…が

「… 全く 男らしい意見だな」

『ええ 今の貴方よりは』

そのための軽装でしょうに と 彼女は続けた

『……解った解った やれば良いんだろ？』

両手を挙げ 呆れた顔で言ってる

「お前がレイヴンやった方が良いんじゃないか？」

『お断りします』

彼女は即座に答えてくれた それに苦笑いを浮かべる

「それじゃ ニーナを信じてみましょうか…っ」と

言いつつ機体の中で軽く腕を伸ばす 首を左右に曲げる 回す

『御自由に 信じるだけならタダですから』

…確かに 信仰するにはリスクのデカイ女神だな …

…雨が降っていた ミサイルの雨 視界を覆うのは G r a
Y C l o u d (灰色の雲) ……

空が輝いていた いや そんな綺麗なもんじゃない

白い煙を伴いながら ミサイルが数発迫る

それを ビルを盾にする事で防ぐ 更に走る

後方で幾つもの崩れ落ちる音が響く

走りながら考える 彼女の言葉を思いだす

つまりニーナはこう言っているのだ

上昇速度はコチラが上 だったらO・Bで突っ切れ

弾幕の雨なんて躲してみせろ そして後ろを取れ

リミット・カットして あとは上からお好きにどうぞ…と

巨大な雲の上はいつだって晴れてるもんだ ミサイルの雨も降りはない

「 ……上等」

ミサイルが迫る それを手近な建物に隠れて遣り過ごす

「それじゃ女神さま」

言いながら 口の端を上げて笑う

「今日のお勧めのデートスポットは？」

『墓の中』

「うるせーよ」

ニーナはその文句を無視し コンソールに目を落す

『少し待って下さい 探してみます』

相手の上を取るにしても 場所とタイミングが命

少しでも間違えば それこそ冗談抜きで墓の中だ

ニーナにはその絶好のポイントを探してもらおう

「時間は？」

『見つかるまでです』

「……オーライ」

次の建物を目指して走る 隠れる

灰色の雲が間近まで流れて来る

ビルを背にその姿を眺める

グレイクラウドが僅かに瞬いた

瞬間 頭部を掠める光の弾丸

続け様に リズミカルな旋律が奏でられる

エネルギーマシンガンの雨 視界を覆う青いカーテン

『まったく 心臓に悪い雨音だ』

手加減って物を知らないのか？

どれだけ撒けば気が済むんだか

残骸の陰から飛び出す そのまま一気に駆け抜ける

光弾が砂地に穴を穿つ　グレイクラウドがENマシンガンバラ撒く

『それじゃ　まずは……』

両手のレバーを左に傾ける　遠くに見える残骸まで走る

ENマシンガンの弾丸が　背後のビルを次々と破壊する

足元で数発　青い光の残滓が弾ける

機体を左右に振りながら　次々迫る弾幕を避ける

いや　数発被弾　舌を打つ　流石に全弾回避は無理か

機体が駆けるたびに　後方でビルの残骸が崩れ去る

もう少しで辿り着く　目的のビルはすぐそこに見える

不意に　聞きたくなかった機械音　背筋に寒いモノが走る

「読まれてた……?!」

不吉な音　それは予想通り無数の瞳

またしても丸い珠は　頭上でコチラを見つめていた

目的のビルを素通りし　そのまま走り続ける

瞳は追ってくる　このままだとエネルギーがもたない

「……………だつたら」

ペダルを思いつきり踏み込む 機体が砂上を滑る

長い長い足跡を残す シートに体を固定させて

次にブレーキを強く踏み込む 機体はそこで急停止

当然 頭上を取ろうと無数のビットが迫る

『 ……レイヴン?』

死ぬ気ですか? と冷たい声でニーナが訊ねる

「男らしいだろ?」

満面の笑みをニーナに送ってやる

『それを馬鹿と言っんです』

呆れた調子で彼女は応えた

程なくして ビットが頭上で狙いを定める

それでも動かない 動くには早い

タイミングを計る 間違えば 終わり

まだまだ まだ 早い ……

手には汗 背筋を無数の蟲が這いずり回る

心臓が ドクンドクンと何度も高鳴る

…気がつくとき 口元が 大きく歪んでいた……

ビットの砲門が開く その間際

目のディスプレイを殴り飛ばす

表示されている文字は？ OVERD BOOST？

ビットから無数の針がシャワーの如く噴出される

それよりも早く 機体が文字通り弾け飛んだ

『…相変わ…らず…へヴィ…』

機体の背部には巨大なブースター

意識ごと飛ばされるほどのエネルギーが

速度となって機体を前に弾き飛ばしていた

そのまま一気に突っ切る ビットを振り切る

視線の先 その上には灰色の雲が浮いていた

その真下を目掛けて走る 後方を確認する

ビットは遙か彼方 追いつくのは無理だ

視線を前に戻す 不意に違和感

眉を顰める 嫌な予感 場が静か過ぎる

それに ENマシンガンが止んでいー

突然の悪寒 それに続いて火花が上がった

『忘れてた!』

巨大なグレネード弾 しかも連射のオマケ付き

呻き声を上げながら それを必死に回避する

辺りに視線を巡らす 盾に出来るものは…無し?!

『突っ込むしかない…ッ!』

火球が迫る 爆煙が上がる 熱風が辺りを包む

ラジエータが目を覚ましたかのように動き出す

その音からも解る 相当な機体温度になっている

『…あ』

自分で呟いた筈の一言が やけに遠くに感じられた
歯を思いつきり食い縛る 体を固定し衝撃に備える
モニターの向こうで ニーナが一言 『馬鹿』と漏らした
足元が爆ぜた 赤々と燃えるグレネードはまさに業火

機体への直撃は避けたものの 至近距離での爆発
心地良いには程遠い爆風で 機体が大きく吹き飛ばされた

息が詰まる 声が出せない 体中が悲鳴を上げている 当然だ

O・Bの勢いそのままに 砂の上を数メートルのヘッドスライディング

暫くその場で横になる 機体を仰向けにする

「痛……」

頭がグラグラする 目の前がチカチカする

起きたくない このまま寝ちみたい気分だ

『午睡ですか？』

ニーナから 棘のついたモーニングコール

呆れました そんな雰囲気を纏わせながら

「ああ 良い夢が見れそうだ……」

『優雅な事で』

彼女は無表情で そんな皮肉を飛ばしてよこす

「……少しは労ってくれよ」

仰臥した機体の向こうに 本物の灰色の雲

グレイクラウドの股は抜けたらしい

体を動かすのも億劫だ が 仕方ない

ブースターを吹かして機体を立たせる

正直な意見 あのまま寝ていたかった

でもそうなれば 次に着くのは花畑か

灰色の雲は遙か遠く アレが旋回してくるまで暫く時間はある

だが 時間切れだ 余裕があるとは流石に言えた状況じゃない

そろそろ答えを貰わないと 墓に逝く前に消し炭になっちまいそうだ

タイミングとポイントは？ その答えを聞こうとして

それを察したのか　二ーナが相変わらずの顔で

『私を信用して頂けますか？』

その問いに　思わず「NO」と言いそうになる

そこを　今日一番の努力で言葉を飲んだ

「……ああ　勿論」

『そうですか』　彼女は言った後　『ですが』　と続けた

『本当にやるつもりですか？』

二ーナ自身で言い出した割に　懐疑的な問いをよこす

そもそも　もう信じるしか無いだろう　彼女の實力は知っている

役に立ったことは殆ど無いが　立つ時はお釣りが来るほど役に立つ

『無茶が好きですね』

「無理じゃないからな　それに……」

口の端を上げ　舌を少し出して告げてやる

『なにせ　女神サマのお告げだしな』

二ーナが口を開きかける　それを　手で言葉を制する

『それに 向こうさんがお待ちかねだ』

遙か彼方 グレイクラウドはデートの準備を終えていた

「待たせるのは 趣味じゃ無い」

数瞬の沈黙 徐にニーナは口を開いた

『解りました お気をつけて』

それに いつもの調子で応えてやる

『 … オーライ』

日は暮れた デートも佳境 ラストはもっと派手に行こう

『さあて……』

パーティーを 始めよう …

- Mission 1 - 今日の終わりに

機械仕掛けの灰色の雲

まるで抱擁をねだるように

巨大な両手を広げ迫る

それを正面から見据える

良いだろう 散々熱いのをもらったんだ

そのお返しはキッチリしてやる

レバーを前に倒す 機体が拳動を開始

ジェネレーターが 鉄の心臓が動き出す

エネルギーが機体全体に周り始める

前進する 3歩目で砂を蹴る

疾走する 4歩 5歩 6歩

ペダルを踏む スピードが勢いを増す

ブーストダツシュ 背景が流れる 砂が舞う

寄り道はしない この道 正面から行く

待ちわびたように 遙か頭上で破碎音

巨体から 無数の光りの束が吐き出される

8連ミサイル 構わず進む 目標は決めてある

前方のビル そこに機体を預ける 次の瞬間

衝撃 立て続けにミサイルが訪れる 着弾する

ビルが崩れる 間に飛び出す 疾走を再開する

モニターに目を走らせる 機体破損率25%

『良かったですね 失敗してもすぐに死ねます』

さらっと恐い事を言う 「そりゃありがたい」

次に青い弾丸 ENマシンガン 幾重もの青い雨が降り注ぐ

機体を振る 右へ 左へ そして ビルの陰へ

「…………死に際からが本当の戦い」

息を吐きながら 何時か言われた言葉を呟く

それはまだ レイヴンになりたての頃に教わったセリフ

ニーナが眉を顰めて

『何ですか？』

思わず笑みが零れる

「こっからが本番って事さ」

再度息を吐く アレが来る 解ってる

そのための休息 エネルギーの回復

以前のような失敗は もうしない

『チャンスは一度 それでもですか？』

唐突に 冷たい声で現実を語る 確かに でも

「一度で十分 何度も付き合う気は無いさ」

チャンスは一度 そう それを掴むか手放すか

それは自分が決める事 自分の腕が決める事

失敗すれば ただ 死ぬだけだ 口が歪む

そして不意に訪れる 予想していた目玉が襲い来る

聞きなれた音 見たくも無い カタチ

ビット 幾度も苦しめられた小型自律兵器 イキモノ だがー…

「遊んでいる暇は無いだ 悪いな」

ディスプレイに手を伸ばす コアの背部

巨大なブースターに力が集まる

正面にはビルの残骸 頭上にはビットの群体

力の収束 そして解放 機体が暴れる 右へ弾ける

ビルが一瞬で無くなる 視界が一面に広がる

ビットの姿が遠くなる お別れだ 軽く手を振る

巨大な影が伸びていく そして視界を覆う灰色の雲

間髪入れず グレイクラウドの両手が炎を射出

吐きだされる塊 身を焦がす幾つもの熱が 目の前に迫る

それを左へ右へ 機体を躍らせ回避する 相手は炎の円舞曲

そのままグレイクラウドの真下に飛び込む

砂煙が激しく舞う 砂を擦りながら機体を反転

「良い眺めだこと」

巨大な尻が目前に 徐々に遠ざかっていく

デートの相手は挑発するように腰を振る

「ニーナ 後は任せる」

ニーナは静かに頷いた

ディスプレイに手を伸ばす

“リミット・カット”

途端 コックピットの中に警告音が鳴り響く

時間が無いぞ 時間が無いぞ 急げ急げ と鳴り響く

解ってる 解ってるって そう慌てるな

胸が高鳴る 手が汗ばむ デートも終わりが近い

もう一度 ディスプレイに手を伸ばす

機体の背後に再び力が溜まる 一拍おいて機体が弾けた

歯を食いしばる 地面を滑るように機体が疾走する

グレイクラウドの尻が一気に近づいてくる

ニーナに目を向ける だが何も言わない

グレイクラウドが迫る だがまだ遠い

ニーナに目を向ける 彼女が目をそらす

なぜ？ それを問い質す余裕はない

体中の骨も筋肉も悲鳴をあげている

グレイクラウドに迫る だがまだ向こうが早い

あと少し…あと少し…近づけ…近づけ…

時間が迫る 警告音ががなり立てる

このままでは時間切れ それ以上に体がもたない

少しでも気を抜くと意識が刈り取られそうになる

今ならまだ間に合うか?! ここで跳ぶべきか?!

だが タイミングを間違えば全ては水の泡と消える

逡巡

それも一瞬 腹に再び力を入れる

ニーナを信じるって言っただろ

自分にそう言い聞かせる

時間切れまで残り半分 だが 半分あれば十分だ

「ニーナ!!」

叫ぶ ディスプレイに目を落とす

俯いたままのニーナが 不意に顔を上げた

冷たい機械のような瞳で 彫像のような口で 彼女は言った

『今です』

突然の轟音 グレネードの火球がグレイクラウドを直撃

ニーナの合図とまったく同じタイミングでそれが起こった

「なっ!?!」

突発的な事に思考が僅かに混乱

それはグレイクラウドも同じだったらしい

動きが僅かに鈍り 高度が落ちる

『レイウン』

ニーナの静かな一喝に 混乱を投げ捨て体が動く

機体が地面を蹴る 跳ぶ そのままペダルを一杯に踏み込む

重力に逆らい高速で上昇を続ける 何の制限も無い灰色の空

「……アレ……は？」

目の端に何かが映り込んでくる

1体のAC ビルの影になっている

それは本当に 一瞬見えた その程度

あれがグレネードを撃ち込んだのかな

頭の端でそんな事を考え……

……ミル……ナ……

「……え？」

………視界が 青い

この青さは見覚えがあった

? L S ・ M O O N L I G H T ? 最高と賞されるブレード

その青を呆と眺めていた まるでニーナの瞳に似てるな

そんな事を考えていた 意識が宙に浮いているような感覚……

ああ そうだ そうだ このブレードを 早く突き立てないと

……突き立てる？ 何に？ 何で？ と言うか 今 何をしてー！…

『そのまま死ぬ気ですか？』

その冷たい声で 意識が一気に覚醒した

直後に足元で爆発

「何が起きてツーー?!」

理由も解らぬまま 後ろに跳ぼうとして 後ろが無かった

視線の先にはただの虚空 機体は宙に投げ出され

真下にあるのは茶色の世界 砂だらけの人の残した残滓

機体の右手を反射的に突き出す ブレードが突き刺さる

目前にグレイクラウドの顔 図らずも熱い口づけを交わす

自分がグレイクラウドの上に乗っていたんだとやっと理解する

今は足場はなく機体は宙ぶらりのまま 支えるのは右手のブレード

火花をあげる機体の右手 このままじゃもたない

そう認識した後は早かった頭よりも先に体が反応していた

ブレードを突き立てたまま重力に逆らわず地上へと落ちる

そのまま真下にグレイクラウドを切り裂く

破片が飛ぶ 火花が散る 光りが舞う 雲が裂けていく

綺麗な断面 その隙間から ソレの内部が伺えた

厚い装甲 鉄の集まり それが今は ガラクタの塊

そして グレイクラウドの姿が 視界から消えた

機体は完全に支えを失う 浮遊感が身を包む

見上げる ヤツはまだ 上空を漂っていた 雲のように

腕を軽く振る エネルギーの供給を断つ 青い刀身は消える

” MOONLIGHT ”の口が閉じる まるで 眠りにつくかのよう
うに

不意に響く爆発音 その音は 徐々に下へと落ちて行く

機体の頭部の女性の声が 仕事の終わりを静かに告げた

「 終わった……? 」

目を閉じて呟く 疲れきった体を操縦席に投げ出す

外を見る かなりの高さまで連れてこられたようだ

『お疲れ様でした』

二丁ナの 味気無い声を聞きながら

「ああ お疲れさん 今回は感謝するよ」

頭の後ろで手を組んで 片目を瞑って応えてやる

『……………いえ』

暫くの沈黙 彼女と見つめ合う

そして徐に 彼女は言葉を紡ぐ

『どちらにせよ こんな所で死んでもらう訳にはいきませんでしたから』

それはどう聞いても テレ隠しには聞こえない

「ああ そつ」

それじゃ お喋りの時間を始めよう

「聞きたい事がある」

『却下します』

「さつきお前は言ったよな？ ”我々” っつのは誰の事だ？」

『言葉の意味そのままです』

「グレイ・クラウドの情報は？ 何処で仕入れた？」

『知る必要は無いでしょう？』

「お前は一体 何を考えている？」

『世界平和を』

と 至つて真顔で彼女は答えた

「……ニーナ 全然笑えない」

『そうですか』

伏目がちに応える やはり無表情だった

肩を竦める 仕方ない と呟いた後で

「だったら最後の質問だ」そう前置き

彼女の瞳を正面から見詰め 真顔で問い質した

「途中から記憶がない…なにがあつた…？」

自分でも意味不明なセリフ 確かに途中まで意識はあつた

だが 気がついたらグレイクラウドの上で ブレードを振っていた

それまでの記憶がゴッソリと 短時間ではあるが抜け落ちている

そんな困惑をよそに 彼女はやはり冷たい声で

『貴方は仕事をしていました それだけです 他には 何も』

そう答えるだけだった

『貴方は……』

最後に 確かにニーナは呟いた

気のせいかとも思うほど小さく

だがその呟きは 上空の爆発音に掻き消される

『お疲れ様でした レイヴン』

聞き返そうと 口を開くよりも早く

ニーナは別れを告げると

『それでは また』

味気の無い機械音を残し 回線が閉じる

一方的な会話の終了 話す事はもう無い と言う事が

溜息一つ 余計に謎が増えただけ 答えはまだ無い

恐らく 次に聞いても答えてはくれまい そんな女だ

「まあ 良いか」

とりあえずは生きてることだし 良しとしよう

楽観的にも見えるが こうでもないとやっつけられない

気の抜けた目を 外へ向ける そろそろ地面が近い

ペダルを踏み込む ブースターを吹かす 機体が宙に浮く

着地の衝撃を殺す そして地上に降り立つ

同時に さっきまで鳴り響いていた警告音が消え

エネルギー残量が0を示した

肺に溜まった息を吐く

操縦席に 深く身を沈める

「…………お疲れさん」

コックピット内壁を 軽く叩いて機体を労う

長い一日が ようやく 終わる…………

『言い忘れましたが』

「おわっ?!」

突然 ニーナの顔がモニターに映し出された

「……なに？」

戦々恐々 ニーナの次の言葉を待つ

『この後すぐ”アイレットシティ”に向かって下さい』

「……何で？」

アイレットシティ？ 何でそんな急に……？

『寝ボケているんですか？ 仕事があるからに決まっていますでしょう？』

……おいこら

「聞いてないぞ！」

『ですから今 お伝えしました ちなみに企業からの依頼です』

誰が行くか！ そう怒鳴ろうとして それよりも早くニーナがそう告げた

「……それは……つまり？」

『断れば 貴方の食い扶持が減ります』

『……マジっ？』

『当然でしょう?』

逃げ道無し 選択肢も無し 嫌がらせか?!

『それと』

それと? それとだって? まだ何かあるのか?!

『明日の10:00までをお願いします 時間厳守です』

「10:00!?!」

『はい それでは お願いします』

それだけ言うと小馬鹿にしたように小さな音を響かせて ニーナは消えた

こっからアイレット・シティまで 何時間掛かると思ってるんだ……

灰色の空を仰ぎ見ながら 思わず呻きを漏らしていた

『>バイ……』

どうやら長い一日は まだまだ続きそうだー……

・ Mission 1 ・ 今日の終わりに（後書き）

これで1つ目が終わりです、こんな調子であと50話ほどあります、
時間がある時にでも修正しながらのんびり上げたいと思います、
ここまで読んで下さった方、ありがとうございます。

「……はい ええ ええ それでお願いします」

女性の声が遠い 誰かに指示を出しているのか

さらに遠くで男の声が「はい」と答えている

「あ すいません ニーナさん」

女性の周りの雰囲気は 慌ただしさを物語っている

それでも態度に機械的なところはなく とても好感が持てる

「準備は出来てますか？ 始めてしまっても良いですか？」

声が弾んでいる どうやら楽しみにしていたようだ

まるで男の子が玩具を買い与えられた時のような印象

『はい お願いします』

そう答えると 彼女は小さく

可愛らしい咳払いを一つして

「それでは 早速ですが」

イリスさんは遠慮がちに切り出した

「本試験は 実戦を想定した模擬戦闘です」

年齢こそ若いがこの研究施設の主任なのだそうだ

兵器の開発・運用などを任されているとか

「全機破壊までの時間に応じて 追加報酬をお支払い致します」

サラもこれくらいしつかりしていれば……

「それでは テスト開始……なんですけど……大丈夫ですか？」

それに引き換え この男は……

思わず 溜息が漏れる

彼の担当になってから溜息が増えたと思う

「ははは」

コックピット中で 突然笑い出すレイヴン

イリスさんは顔を引きつらせている

「あのお レイヴン？」

「ははは 待てえ」

イリスさんが小さく「ひい」と声を上げた

可哀想に あれは怖いというより

気持ち悪がっている表情

「なっ なに?!」

「あはははは」

男はなおも笑い続けている

目はどこか遠くを見ているようで

実に腐った魚の様な眼をしている

「あ あのお……」

「うふふふふ」

怯えるイリスさんに『申し訳ありません』と告げる

レイヴンは未だに虚ろな表情で薄気味悪い哄笑を続ける

この男を見ているといつも思う この男を……

『……したくなります』

イリスさんが小さく「え?」と言って固まり

突然レイヴンが跳ね起きた　そして酷く怯えた表情

その顔があまりにも情けなくて　また　溜息

こんな男が本当に・・・

それだけでなくも気が重いというのに……

今日は疲れているのだろう　早く終わらせよう

レイヴンに改めて指示を出そうと顔を上げると

男は何故か　訝しげに眉を顰めながら難しい顔をして言った

「……………つて……………誰？」

駄目だ　この男は　駄目だ

男には何も答えず　モニターをイリスさんに切り替え

『これから行うテストについてですが』

少し怯えた表情のイリスさんに回線をつなぐ

「あっ　はいっ」

少し声が震えているように感じる　何故だろうか

まあ　あの男のせいだろう　あまり気にせず本題に入る

私の質問に いや 半ばお願いに イリスさんは驚嘆した

……まだ 頭がボーっとする

もしかして疲れてるんだろつか……って 当然か

ここは？ザーム砂漠？から東にある都市 ？アイレットシティ？

次は ここで依頼があるから行ってくれ ニーナにそう言われた

しかも 10:00まで との制限付き

グレイクラウドの件を終えて バタバタと行ったり来たり

途中 セントラルオブアース近くで 得体の知れない連中と遭遇

これで時間を無駄にしたが なんとか アイレットシティに到着

到着してすぐに 休む間もなく機体の整備とパーツの交換

これに手間取り時間をロス まさかここまで酷いとは……

最後に組み上がった機体の調整 そして今に至る

途中から寝不足と疲れで意識が飛んでたのか

記憶があやふや 頭痛いし……

そう言えば ここに来る途中で遭った連中

MTやらACの団体さんだが あれはなんだったんだ？

どうもきな臭い感じがする 厄介ごとが起こりそうな感じ

…まあ その事は今は置いておこう 目の前の仕事を片付けよう

頭を数回 掌で軽く叩く まだ目が覚めてないのか

なんか途中で見知らぬ女がモニターに映ってた気もするし

「は？！」

モニターから素っ頓狂な声が上がった

どうも困惑しているようだ この声は記憶が間違っていないきゃ

この地下兵器試験場の女性主任で 確か【イリス】と言ったはず

ここに来た時 一通りの説明を彼女から受けた…と思っただけど覚えが無い

確か何日か泊まり込みで 新型支援兵器のデーターを採る とか何とか

これが終わったら もう一度聞いてみよう

「……はあ？！」

さっきから何を一人で盛り上がってるんだ？

それになんだその「あんた正気?!」みたいな声

「何を言っているんですか!? そんな…そんな事…

それだと最悪 レイヴンが死んでしまいますよ!？」

は？ 死ぬ？

「か…構いませんって いやでも…死んでしまったら…その…責任が…」

誰と何の会話してるんだ？

それから数秒 主任さんの声が途絶えた

何だかこの沈黙 凄く怖いんだけど……

「それは…こちらとしては願っても無い事ですが…」

全然話が見えてこない が しかし

なんだかヤバイ方向に進んでる気がする

何せ主任さんの声がセリフと合っていない

「私止めましたよ でも超やってみたい」

みたいな 胸の高鳴りを抑えられない

そんな含みを持った声音で話してる

「本当に宜しいんですか？ 宜しいんですね？」

おいおい 主任さん笑ってるよな アレ……

「……解りました 設定の変更を行います」

何かを変更するらしい 嫌な予感がする

主任さんの後ろから 別な男や女の声で

「本気かよ……」とか「責任は無いんですよね？」とか

「面白くなってきた！」とかはっちゃけてる奴までいる

その歓声にも似たざわめきを 恐らく主任さんだろう

しー！と言つて周りを静めていた そして

「……あの……レイヴン？」

おずおずと 話しかけてくる

「……なに？」

「そろそろテストを始めたいのですが その……大丈夫……ですか？」

全然宜しく無いんだけど 仕事なので一応「はい」と答える

「あつ…い…いえ 大丈夫ならそれで良いんです!」

一気に捲し立てるように主任さん

……? なんか焦っているような…?

「ところでさ 設定の変更って言うのは?」

そう聞くと主任さんは「はっあ!」とか奇声をあげ

「ななな 何でもありません 気にしないで下さい!」

いやいやいや 何でもあるだろ あんた

「いや でもさ…」

なおも主任さんを問い詰めようと口を開きかけた時

小さな電子音と同時にニーナが顔を見せた

『先ほどから何をしていますのですか?』

いつも突然出てくるな……

「いや何って 仕事の話し ちょっと質問を…」

『質問など不要です 貴方は与えられた仕事をこなせばそれで良いのです』

まさに二の句も告げられない 相変わらずキツイ

しかし その通りなので何も言えない

「解った 解ったよ んじゃ始めようか」

今日は疲れてるし さっさと終わらせて休もう

右肩を軽く左手で叩く 体中が凝ってる

そりゃこんな狭いところにいれば当たり前か

「……………そうだ」

はたと思い出した そう言えば

「ニーナ 一つ聞きたい事があるんだけど」

『なにか？』

「さっきさ モニターに知らない女が映ってたんだけど 知ってる？」

気のせいかとも思ったんだけど それにしては鮮明だし

だがその質問に ニーナは 深い 深すぎるほどのため息

「どっした？」

「……………何でもありません テストを始めて下さい」

なんか怒ってる…？

「…あ…ああ」

何だろ？　なんか悪いこと言ったか？

疑問を抱えたまま　とりあえずレバーを握る

そつえば　今回の仕事の内容って

「ところでテストって　支援兵器の破壊だっけ？」

主任さんはその質問に　どこか落ち着きなく

アワアワといった感じで答えてくれた

「あつ　はい！　4機の支援兵器　？D-1？の破壊です

出来るだけ　早い時間で破壊して下さい　時間に応じて報酬が追加
されます」

「了解」

実に単純で明快　今回はどうやら楽な仕事みたいだ

「では　準備は宜しいですか？」

「いつでも」

「それでは　テスト開始」

んじゃ 張り切って行きま……

「……って オイ」

これは目の錯覚だろうか ついに疲れが目に来たか？

「なあ 主任さん？」

「……はい？」

「なにこれ？ なんか動きが異常に速い気がするんだけど……？」

「……それは……そうだと思います」

「……なんで？」

あれで テスト機体？

その辺のACより馬鹿速いんですけど

「これを 破壊するの？」

「ハイ」

テヘツみたいな感じで返事されても困るんだけどね

「もう少し 遅めにならない？」

「それが このレベルでの要望でしたので」

誰だよ そんなこと言ったの

……そんなの一人しかいねえわ

さっきの主任さんの困惑っぷりを思い出す

こんな事言う奴は アイツしかいないだろう

肺の中の重い酸素を全力で吐き出す

「……頑張ります」

前途多難 頭に浮かんだ唯一つの言葉

- Mission 2 - もう一人の・・・

「見た目以上だな……」

あのテスト機 尋常じゃなく速い

軽い発砲音に続き 軽い衝撃

背後を取られ同時に攻撃される

放たれた散弾が 機体に穴を穿つ

そしてまた テスト機は距離を取る

「イヤな戦い方しやがる」

4体のテスト機は 高速で移動している

そのうち近づいてきた1体を斬ろうとすると

背後にいる別のヤツが攻撃する

それに気を取られると また別のヤツから

さっきからこの繰り返し

「支援どころか主力になれんぞ」

忙しなく機動する敵を目で追う

素早く相手の位置を確かめる

前方に1体

左斜め後ろに1体

右斜め後ろに1体

そして 頭上に1体

ちょうど三角形の中心に置かれている これが今の状態

しかも こちらと同じスピードで等間隔でついてくる

まさに檻に閉じ込められている気分

イヤになるほど完璧な布陣

「さて どうするか」

今日2度目の自問自答

頭を悩ましている所に 小さな電子音

それに続いて ニーナの不満気なセリフ

『やる気はあるんですか?』

いきなりだな オイ

通信と同時に 頭上から散弾が撃ち込まれる

前に出てそれをやり過ごす

前方のヤツが後退しながら攻撃

左へ平行に走り これを躲す

敵の布陣が崩れかける がすぐに元に戻る

やる気ね……はっきり言って

「無い」

呆れているのだろう 小さく溜息が聞えた

『何故ですか？』

二ーナの問いかけは続く 敵の攻撃も休まらない

左後ろのヤツが撃つ

素早く後退

散弾が広がる前にその範囲から離脱する

前方と右後ろからの同時攻撃

左のヤツはまだリロード中

その隙を突いて 左後ろへ跳ぶ

左の敵機に 機体ごとぶつける

案の定 距離を離し機体を避けられる

だがこちらにも攻撃を躲すことに成功

「理由ね……」

まあ 疲れている と言うのは確かにある

だが 戦闘になればそんな事は関係無い

理由は別にある それは実のところ……

「あの ニーナさん」

不意に別な方から声をかけられる

突然割り込んできたのは主任さん

少し不安なのだろう 声が落ち着かない

「彼は その 大丈夫なんでしょうか？」

20分以上の戦闘に 主任さんは心配してくれてるらしい

それがとても嬉しくて涙が出そうになる ニーナと大違いだ

「これ以上続けるのは危険です 今日にはもう終わりという事で……」
主任さんの嬉しい申し出に 『そうですか』とニーナ
『ところで今回のデータは 使い物になりそうですか？』
またいらん事を……

ニーナの主任さんへの質問にバツが悪くなる

『はい！D-1の集団戦闘での記録は十分です』

嬉しそうな声の主任さんと対照的に 冷めた表情のニーナ

「……………あれ？ え?!」

手元のデータを何度も見直す

「変……ですよ……ね……？」

研究員の一人がぼつりと言った

「なんですかこれ」

別なところからも声が上がる

ニーナさんには有益な情報

と言っておいてなんだけど

確かに変だ これはあり得ない

「何ですか？ この被弾率」

そう D・1の攻撃が ほぼ当たっていない

一見優勢に攻めているようで 実の所は真逆

これは……遊ばれてる……？

「主任さん」

突然のレイヴンの声に 体が跳ねる

「あ……はい?!」

「1」の上のレベルは あるの?」

何を馬鹿な事を言ってるの?

これ以上なんて 人間が対処できるわけがない

正直に言うと このレベルならレイヴンに勝てると思っていた

それなのに……こんなことって……

「……いいいえ これが現時点で最高のレベルです……」

レイヴンは私の答えに「そう」と言っ

「そろそろ終わりにする 良いかな？」

なんて 簡単に言っただけだ

ちょっと買い物に行ってくる

みたいなノリで

「終わり…と言っのは…？」

「仕事するのさ アレを破壊する」

悔しくて 言葉が中々出てこない

自分の甘さと認識不足に腹が立つ

なにより馬鹿にされたようで……

レイヴンなんて 正直時代遅れだと思っていた

私達こそ代わりを造れると思っていた なのに……

「分かりました……」

「了解」

主任さんとの回線を切る

さて…と 始めましょう

相変わらず 三角の陣形は崩れない

だったら力ずくで行かせてもらう

素早く左右に目を走らせる

ちょうど良い場所が少し離れた場所にある

レバーを右に倒す ペダルを踏む

右へ平行にブーストダッシュ

もちろん4体とも追走してくる

だが程なくして 甲高い音が響く

右斜め後ろのD-1が壁に機体を擦る

「ちゃんと周りは見ないと」

僅かに体勢を崩した1体に向けて

裏拳を放つと同じ要領でブレードを振る

D-1の半ばまで ブレードは食い込む

振り抜かず わざと食い込ませたまま

腕を戻す勢いで頭上のヤツに投げつける

2体の機体が激しく衝突し体勢が崩れる

それでも布陣を戻そうとする　だが遅い

すでに真上に跳んでいる　そのまま斬る

2つの爆音

一つは投げられたヤツ

もう一つは　斬られたヤツ

残るは前方と左後ろの2体のみ

着地と同時に目の前のディスプレイを押す

そして右斜め前方に一瞬だけ跳ぶ

つられて左後ろのヤツが前に出る

次の瞬間　機体が弾け飛んでいた

OBが発動　一瞬で左後のD-1との間を詰める

そのまま水平に腕を振るう

ブレードの刃が深々と食い込む

そして 先程と同じ要領で残る1体
前方のD-1に目掛け投げつける

「残念」

さすがに これは外れたが

すでに OBは発動している

投げつけたのは ただの目くらまし

距離を離そうと後退するD-1 だが

「遅い」

敵は射程の中 刃の届く致死の距離

D-1を鋭利な青い光が真横に薙ぎ払う

【モクヒヨウ タッセイ】

機械の女性が 仕事の終わりを告げた

「終わった 終わった」

首を軽く回す 鈍い音がした

これで今日の仕事は終わりの筈だ

……終わりだよな？ いや そう願いたい

そこに小さな電子音 通信が入る

思わず体が跳ねる だがー…

「……あれ？」

モニターに 見知らぬ女性が映っていた

「えっと……」

それはさっき見た女 やっぱり気のせいじゃなかった

まじまじとその顔を眺める 見れば見るほど美人さん

整いはまさに彫像…いや 雰囲気からすると氷像か？

『目は』

その女が口を開く

『覚めましたか？』

あれ？ この声 もしかして……

「もしかして…ニーナ？」

お互いに沈黙　そしてニーナの溜息

『まだ寝惚けているのですか？　でしたら　もう一つ依頼を……』

「待った！　ちょっと待て！」

冗談じゃない！　これ以上は死んじまう！

「と言うかニーナ　メガネは？」

そう　確か彼女はメガネをかけていた

それに髪型も全然違う

まるで何処かに出かけるような……

『これですか？』

胸ポケットからいつもの縁無しメガネを取り出し

自然な仕草でメガネをかけた　ああ　確かにニーナだ

『もしかして　本当に気がついていなかったのですか？』

「すみません」

と言うか　これだけ変われば一目じゃ気がつけないと思うんだけど

……

『節穴ですね』

間違いありません 本人です

女ってのはこんなに化けるもんなのか

どうせなら中身も変わってくれば良いのに

やはりニーナは絶好調でニーナだった

「それで？ 何でそんな格好？」

ああ 目が言ってる 『貴方には関係ない』と

軽く肩を竦める 別に無理に聞く気もない

『それでは お疲れ様でした』

相変わらずの素っ気なさ

小さな電子音がサヨナラを告げた

まあ 良いや 今はもう眠りたい

「お疲れ様でした…あの…レイヴン…」

間髪入れずに今度は主任さんからの通信

「どうしました？」

まさか もう一度データの取り直し？

それだけは勘弁してくれ 心の中で嘆願

「D-1のどこがいけなかったんですか？」

「えっ？」

予想外の主任さんの言葉に 思わず言葉がでない

「何処かに欠陥が無ければ このような結果にはならない筈です！」

泣いてる と言うか キレてる？

「D-1のプログラムは完璧だった筈です！」

ああ 確かに完璧だった でもさー

「逆」

「えっ？ 逆？」

「そう 逆ですよ あれは完璧すぎた」

「完璧…すぎた？」

「ええ 動きが完璧で単調」

そう 最初こそはその速さに驚いたが

よく見ると動きが掴みやすかった

「要するに 困む 撃つ 離脱 これだけ」

確かに陣形は 完璧だ でもそれが仇になっていた

どこにD・1がいるか解れば 対処も回避も割りと容易い

「でも これがもし広いトコなら結果は変わってたかも」

「それは何故？」

「障害物が無い」

さっきやったように どんなに完璧な布陣も

障害物があるだけで布陣が乱れるようじゃ

いくらだって浸け込む隙が出来る

それにも対応できなければ意味が無い

「なるほど……」

納得してくれたようだ これで眠れる

「解りました 改良の余地は 十分にありますね」

改良と言つか 人が動かせばどうなるか

あの動きに 予測不能な攻撃 十分脅威になると思う

まあ操縦者本人が あの動きについていければ だけど

「今回は 本当にありがとうございます」

そう言えば テストは数日泊まり込むって聞いたけど

「休憩したらまたテストを？」

眠らせてくれさえすれば いくらだって付き合える

何より割りとなかなか仕事だ 暫くは稼がせてもらえるかな？

「いえ 今回の分で十分です」

だが 期待してた返事とは正反対の主任さんの答え

「このデータを基に さらに改良を加えます」

仕事が……墓穴掘った？

「次の改良版の機体が完成したら

その時はもう一度テスト お願いできませんか？」

そうでもないか

「勿論 依頼さえもらえば」

「ありがとうございます！」

無邪気に笑う彼女は 嬉しそうに楽しそうに

「次ぎこそは 貴方を倒してみせますね!」

オイオイ 趣旨変わってないか?

「……良いや もう 寝たい」

現在の時刻 10:55

日の光を背に 一人 寢床を求めてさ迷う

同時刻 コルナートベイシティ

ファールレーン海岸 バレーナ社工場近く

雨が降りしきる中 1体のACが 佇んでいる

いや よく見ると その周りには無数の残骸

元はへりだった物 もしくは 戦車だった物

無数の鉄屑が散らばっている

その中で 一人静かに佇んでいる

小さな電子音 コールサイン

「ミコト 依頼は終了した データの転送を」

『解った』

ミコトと呼ばれた女性は このレイヴンの成した結果を依頼主へと送る

『かなり早かったけど 途中で切り上げた？』

「いや」

その結果を確かめるように 彼女はデータに目を落とす

戦車 65体

ガードメカ 46体

敵総数 111体

『クライツ 残りは？』

？クライツ？と呼ばれた男は静かに首を振った

『それってもしかして 全滅？』

思わず苦笑いを浮かべ

『相変わらず バケモノよね』

ミコトはどこか満足そうにコンソールを数度叩く

『まあ 良いわ データーは転送しておいたから』

「ああ」

その返事を聞いてミコトはまた苦笑いを浮かべる

この男の口数の少なさは 今に始まった事ではない

小さな電子音 それはメールの着信音

それも依頼主である？エムロード社？から

『ねえ クライツ 追加依頼来てるけど』

「内容は？」

『追撃だつて 追い込みかけるみたい』

そのメールは クライツが予想以上の働きをしたため

これに乗じて一気に攻め込むと言う内容だった

『是非もう一度力を貸して欲しい だつて どうするの？』

「悪いが」

クライツはすでに 輸送機に乗り込もうとしていた

「別の約束がある」

『そう 解った じゃ お断りね』

「そうしてくれ」

クライツが乗り込むと 輸送機は飛び立って行った

そして その場には誰もいなくなる

ただ 雨と鉄屑のみが 残っていた

現在 23:15

ニーナはコックピットの中で眠る男を一瞥し 数秒思考した

なぜこの男は こんな所で眠っているのか 意味が分からない

まあ どうせまたくだらない理由なのだろう 考えるだけ無駄か

すぐに気を取り直すと ニーナは徐に口を開いた

『レイヴン 仕事です』

……あう？

間の抜けた声をあげ 寝ぼけ眼を開く

ニーナと目を合わせ そして嫌な顔をした

深夜1:40

?アイレットシティ?からさらに東

極東の都市?フォークシティ?

『依頼の内容は 先程説明した通りです』

ニーナは担当の男を見ることもなく

ただ淡々と文面を読み上げる

『試作品を預かるMTの護衛をお願いします』

それを男は 聞いているのかいないのか

一見すると起きているのかどうかも怪しい

『別のレイヴンが試作品を破壊するために向かっているそうです』

それにニーナは全くお構い無しで話しを続けていく

『そのレイヴンを撃退して下さい』

そこまで一気に読み上げると ようやく顔を上げ

『それでは お願いします』

それだけ言うと ニーナは消えた

「…わか…た…」

「アンタが雇われたレイヴンだな？」

ゴツイ2足歩行型MT それに搭乗する

試作品を預かった男は緊張していた

仕事とは言え　なんで自分が……

心の中で恨み節を吐くのはこれで何回目か

たまたまMTの操縦が他より上手かったと言っただけ

MTでの戦闘など　生まれてこの方一度も体験したこともない

それなのに　なんで自分が……

視線は警戒と言うより恐怖に彷徨わせ

パイロットスーツの喉部分を引っ張り

少しでも酸素を確保しようと忙しく

グローブの下では掌がびしょ濡れ

何度も自分の膝で拭いていた

「護衛対象は　俺の機体に積んである」

喉がカラカラなのを　唾液を飲むことでやっと補う

男は重圧に押し潰されそうなギリギリの所で

なんとか意地を張って保っていた

それにしても　と　男は少し不機嫌だった

何度も話しかけてるのに返事もしない雇われ者

「オイ！レイヴン聞いているのか！」

怒鳴りつけてもレイヴンは うんともすんとも言わない

たださつきから 小さく呻き声のようなのが聞こえるだけだった

「オイ！！返事くらいしろ！！！」

やはりレイヴンは無言 男は舌打ちをし言葉を吐き捨てる

「おい！何とか言ったら……！！！」

そこまで叫んで だが男は言葉を飲んだ

レイヴンの様子がおかしい事に気づく

「……くう」

男は聞き耳を立てる

呻き……と言つか ころって

「……くう」

ちょっと待っててくれよ……まさか？！

「おい？！ レイヴン？！ レイヴン？！」

寝てる！？ 寝てるよね？！ ねえ？！

「起きてくれよ！？ なぁ！ おいつて！」

だが どんなに喚き散らそうが レイヴンは起きる気配がない

「レイヴン！ おい！！ レイ………」

ヤバイヤバイヤバイ もう敵来るって！ 来るって！！

男が後ろを振り返った時だった 遠くで光が2・3度瞬く

「えっ？」

男は遠くを凝視し そして悲鳴を上げた

青い機体が入り口近くで仁王立ちする姿

敵の肩口が破裂する それに続いてミサイル

白い煙の尾を振りながら ACとMTに猛然と迫る

「レイヴン！ 起きてくれ！！ 敵が来た！ レイヴン！！」

MTの男が悲鳴を上げる それでも動かないAC

迫るミサイルに MTは咄嗟にACの後ろに隠れる

そのすぐ脇をミサイルが飛び去っていき 爆発

間髪入れずに青い機体が遠くで腕を振る

その腕から黄色に輝く光の刃が文字通り跳びかかる

中距離攻撃型のブレード

白兵戦用のブレードと違い 威力は格段に落ちる

だがブレード部分を飛ばすことで中距離を補える

接近戦が苦手でかつ武装を充実させたいレイヴンが多く好む

青いACもその部類なのだろう 中・遠距離に対応した機体構成だった

だが 接近戦しかできない筈の黒いACは微動だにしない

MTはそんな味方のACを置き去りに壁の隅に素早く逃げこむ

同時に着弾音が響いた 次いで機体が倒れこむ鈍い音

黒いACに その光刃が当たっていた

「大丈夫…か？」

恐る恐るMTの男はレイヴンに問い掛ける

だが 返事はない

「まさか…今のアレで…？」

男は背中に冷たい汗をかいていた

これでレイヴンが終わりなら次は自分

最悪な未来を思い描いていた

「…おい？…おい！？」

突然むくりと黒いACが起き上がる

そのまま敵の青いACを静かに見つめていた

「起きたのか…？」

そのまま緩慢な動作で機体が起き上がり

動き出したと思ったら 走り出した

そのまま 敵に突っ込んでいく

いきなり向かってきた相手に驚いてか

それでも青いACは反射的に黄色い刃を飛ばす

だがそれを 黒のACはあっさりと回避する

そのままブレードを真横に払うように振った

だが青いACもそれをギリギリで回避する

それでも黒いACの動きが止まらない

黒のACはOBを発動し 青のACとの間合いを潰す

青のACはそれを迎撃しようと腕を上げる

銃を構え引き金を引く それよりも速く

黒のACは下から上にブレードを切り上げ

青のACの構えた銃器ごと 腕を斬り落とす

そのままの勢いで体当たり 青のACが吹き飛ば

飛ばされながらも青のACは負けじとブレードを飛ばす

それを読んでいたかのように黒のACは真横に回避

青のACの側面でブレードを振り上げながら

黒のACにのるレイヴンが雄叫びを上げた

「眠てる邪魔をすんなあああ!!」

青のACは 頭部から肩へ斜めに斬り落とされた

「スゲエ……」

初めて目の当たりにしたAC同士の戦闘に

MTの男は呆然と口を開けて声も無かった

青のACは戦闘の意志が無くなったのか

尻餅をつく形で黒のACを見上げていた

「なんだありや…?!」

それは突然 青のACから射出された

ミサイルでもレーザーでも弾丸でもない

小さなソレに MTの男は目を凝らす

ACに詳しくない男はそれがビットだと理解出来ず

武器なのかどうかすらも分からないでいた

だがそれを見た瞬間 黒のACは走りだしていた

迎え撃つように 小さなモノからレーザーが放たれる

被弾しながらも 回避する程じゃないとばかりに

お構いなしと黒のACが接近し そのままブレードを

小さな無生物 ビットへと突き刺す

小さな悲鳴を上げて それは破裂する

「ビツトなんて もう見たくも無い……」

レイヴンは心底嫌そうな声で小さく呟いた

そのまま青のACに振り返ると レイヴンは言った

「まだやるかい？」

数秒 2体のACは見つめ合う

徐に青のACは持っていた銃を地面に落とす 響き渡る鈍い音

そのままゆっくりと両手を上げた もうたくさんだとばかりに

回線越しに ふたりのレイヴンは通信を交わす

それをMTの男はどうしていいか分からずただ見守る

「わかった」

黒のACのレイヴンが笑いながら答えると

「行けよ」と 黒いACのレイヴンは言い

「じゃあな」と 青いACのレイヴンは答えた

鈍い音をタテて 青い機体が動き出す

背を向けると そのまま 走り去る

「逃がしたのか?!」

MTの男が驚きを隠さずに問い質すと

「ん？ ああ 別に「殺せ」と言われている訳じゃない」

と 黒のACのレイヴンが 悪びれもせずに答えた

「しかし……!」

なおも詰め寄ろうとしたMTの男よりも早く

黒のACの中で 小さなコールサインが響く

『相変わらず 甘い事ですね』

ニーナが話しに割り込む

その声音には 怒った風もない

「悪いか？」

『別に』

ニーナはそれだけを レイヴンに告げた

実際 どうでも良いと思っているのか

彼女から感情を読み取ることはできない

「ところで 仕事はこれで終わりだろ？」

中途半端に かつ激しい目覚ましのせいか

レイヴンはまだまだ眠そうな顔をしていた

『はい 護衛は完了しました』

MTの傍らに 企業の間人なのだろう

何台かの車両と人間が到着し作業していた

「それじゃ お疲れさん」

『はい お疲れ様でした』

日の光が眩しい

只今の時刻 10:30

カラダが……痛い

体の節々が 変な音をたてる

睡眠不足

中途半端に起きたせいか

無駄に頭が冴えて眠れなくなった

しかたなく街に出て飲みについて

そのあと記憶がなく 気づいたら部屋にいた

変な体勢で寝てたせいか 首まで寝違えていた

今日はこのまま寝て過ぐそう

心に決めてからは早かった

そのままベッドで寝直そうと一歩目を踏み出す

不意に 小さなコールサイン

部屋に備え付けの 小型のコンソールが鳴いた

『爽やかな朝ですね』

二丁ナだった 無表情で言うセリフじゃない

「いや 寝るよ?」

『早速ですが 仕事です』

無視か コラ

『どの依頼になさいますか？』

…？ どの依頼？

「選ぶほど 依頼があるのか？」

やる気はさらさら無かったが

仕事の内容だけは気になったので

コンソールを数回叩いてモニターに映す

へえ 三件か

「この仕事の詳細は？」

はい と言った後 ニーナが丁寧な口調で

『航空機の護衛 戦艦の破壊 それに……』

何気ない会話をするような口振りで

『セントラルオブアース襲撃者の排除です』

「ふーん……？」

ん？ セントラルオブアースを 襲った？

「それって……」

不意に小さく着信音

コンソールの右上にメール着信の表示

「……仕事が2件増えた」

『そのようですね』

ニーナは手早くコンソールを操作し内容を読み上げる

彼女が読み上げる内容を一緒に目で追っていく

『一つは？エムロード社？から』

内容は単純　？エムロード社？が本格的に？バレーナ社？の工場に襲撃を仕掛ける

だが　？ファアレーン海岸？に設置された砲台が邪魔　だから先に行って破壊しろ

と言つのがこの依頼の概要　要するに　露払い

報酬は650000と悪くは無い

『もう一つは　排除の依頼ですね』

とあるレイヴンを消すために　力を貸して欲しい

？バローズヒル？へ依頼と称して誘き出す　そこを二人で叩く

報酬は2人で山分け 1人頭76000C

かなりの額 にしもロクでもない

『こちらの依頼で宜しいですね?』

オイマテ

「こんな依頼は受けないよ」

自信も実力も無いヤツとは組めない

なにより目標の情報が全然無い キケンだ

とりあえず近場の依頼は…露払いの砲台排除

もしくは セントラルオブアースか

……あれ?

「1つ消えた 他のレイヴンが引き受けたのか」

露払いの方は別のレイヴンに取られたらしい

『でしたら セントラルオブアースの依頼を受けておきました』

「まだやるなんて言ってないんだけど……」

勿論 ニーナは黙殺 淡々と依頼の受領作業をしていた

朝の爽やかな空気をも濁らすほど深いため息を吐く

まあ 良いか 少し気になる事もあるし……

「セントラルオブアース襲った奴らな 恐らく見かけた」

『いつ?』

「アイレットシティに向かう途中 たまたま森の中で」

へりの中から見ただけだったけど うまく偽装してた

セントラルオブアース襲うためにいたのか 納得した

『それではセントラルオブアースに向かって下さい』

「了解」

目指すは中枢都市 ? セントラルオブアース?

- Mission 4 - 襲撃 占拠

時刻 10:40

コルナートベイシティ

バレーナ社工場近郊

ファーレーン海岸

輸送機が 一体のACを投下して去る

ACはその場に残され 立ち尽くす

眼前には いまだに眠る 獣の群れ

数機の砲台が殻に閉じこもり 眠っている

『珍しいよね こんな依頼 受けるなんてさ』

幼さの残る 甘い声

「労働つてのは楽しいよな」

無理に明るい焦り声

『つつそだあ』

それはないよ と少女が言い

「ひでえ……」

即答されて 男は少し涙声

『なんでかなあ?』

少女の顔は にこにこ笑顔

だが 声は笑っていないかった

男は視線を遙か彼方へ逸らす

『ねえ なんで?』

少女は声で さらにプレッシャーをかける

「実は……」

男はついに 観念したらしい

『実は?』

「……金欠です」

『またあ? 無駄使いたんだね?』

仕方ないなあ と 少女

「いやあ どうしても欲しいブレードがあつてさあ」
半ば投げやりに男は答えた

『前の青いのは？ どうしたの？』

少女の言う？青いの？とは

？LS・MOONLIGHT？の事だろう

男はバツが悪そうに顔を背けると

ぶっきらぼうに一言

「売っちゃまった」

『ええ なんでえ！？ 強かったんじゃないの？』

驚きに目を丸くする少女に 男は膝を叩きながら

「ああ！ あれは最高のブレードだった！」

『じゃ なんで売ったのさ？』

訳が分からないよ と少女は訝しげな表情

「そんなの 決つてんだろ？」

どこか誇らしげに男は答えた

「今度のは？最強？だからさ」

『……はあ』

少女はがつくりと肩を落とし 深い溜息を吐いた

『まあ いいよ』

少女は 仕方ないな と苦笑を浮かべた

『だったらお仕事 頑張らなきゃね！』

見た目よりもシツカリしているらしい

「だな そんじゃあさっさと終わらせるか！」

『おー！』

ちよつと気の抜けた戦闘の合図

同時に 眠りから覚めた獣の咆哮

緑のACに向けて 一斉に火球が吐き出される

「遅えよー！」

機体は地を蹴り 目覚めた獣に襲い掛かる

時刻 午後12:30

サテライトシティー4

ちょうど昼時 飲食店街は賑わいをみせる

何も知らない 知らされていない人々の笑い声

平和な都市のその中心 ? セントラルオブアース?

そこを A C・M Tの集団が襲撃 そして 占拠

その目的は不明 理由も不明

唯一つ解っている事 そいつらは相当 やる と言う事

「単なる馬鹿か それとも…」

言葉尻を潰すように ニーナが無感情で割り込む

『ただのバカでしょう』

相変わらずキツイ

『でなければ 貴方と同類です』

何の同類だコラ

「……………で? コイツラの正確な数は?」

『ねぇ』

さあって……

『貴方の方が詳しいのでは？』

確かに見たって言ったけどさ……

「あの時は少なく見ても十数機」

あれだけの数を相手にするのか？

いや 流石に抵抗くらいはしただろう

防衛用のMTもあるだろうし

「だとすれば 多くて5・6機つてとこか」

セントラルオブアースに攻め込むような奴だ

さぞかし腕に自身があるレイヴンなんだろう

『楽しそうですね』

ニーナが冷めた目で 無感情に言った

「…うーん 他のオマケが無かったらな」

強い奴とはできればじっくり一対一で戦りたい

『オマケは多い方が面白いのでは？』

「その分 余裕が無くなる」

単なる仕事で終わらすには勿体無い

「まっ とりあえず」

ここで話していても仕方が無い

ちょうど話しの区切りでコールサイン

依頼主との御対面 その顔には 相当の焦りが伺える

「君も知つての通り」

時間が惜しいのだろう 早速本題に入る

「我が政府の中枢都市であるここ ? セントラルオブアース? が

とある? レイヴン? の襲撃を受けた」

レイヴンが首謀者?

珍しい話もあるもんだ 飼われるのが嫌になった口か?

「政府の中枢区域にレイヴンの侵入を許すなど前例の無い事態だ」

よほど悔しいのだろう 声が怒りで震えている

「目標は都市中心部の? セントラルガーデン?」

そこに逃げ込み 抵抗の姿勢を見せている」

どうやらお目当てはまだ生きているらしい

「大規模出動による排除も可能だが

政府中枢にレイヴンの侵入を許したなど

公にする訳にはいかない 断じて出来ない！」

…これだから役人は…まあ 無理も無いか

これ以上 恥を晒す事はしたくないだろうしな

「今回に限り特例で入場を許可する

任務の確実な遂行を 期待する」

「……了解」

それじゃ お待ちかねといこう

中心都市のさらに中心 ? セントラルガーデン?

まず一番最初に目に付くのは 大きな塔のような建造物

塔の周りには澄んだ水が流れ 数本の樹が植えられている

さながら楽園ってやつをカタチにしたような風景

その美しさはまさに ” 象徴 ” として相応しい

だからこそ目立つ 不似合いな無粋な鉄の塊が2体

うち1体は シンボルタワーの頂上から見下ろすA C

? ソウルアーミー? と名乗るレイヴンが呟いた

「来たか……」

どこか諦めにも似た響き

「もう……逃げられんな……」

覚悟を決めた者の 静かな決意が伺える

こいつは 強い

「……お前だけか?」

ソウルアーミーは意外そうに聞いてくる

それはそうだろう 排除ならもっと人が多い

そう思うのも無理は無い

「ああ 勿論」

でもお断りだ 誰にも邪魔はさせたくない

「だったら最後は 存分に戦わせてもらう」

ニーナの言う通り コイツは同類かもしれないな

『始める前にお聞きしたい事があります』

ソウルアーミーは 機体の中で驚きの表情を浮かべていた

その女性は 回線を強引に開き通信してきたからだった

美しい顔に 冷たい雰囲気を持った女 ニーナだった

「……………悪いが 後にしてくれ」

『貴方が死んだ後では聞きようがありません』

はっきりと言う変な女

ソウルアーミーの印象はそれだった

小さく鼻で笑うと ソウルアーミーは

「大した自信だな それが偽りでない事を祈る」

心からの望みを 思わず口にした

『……………それは保証します』

やはりはつきりとニーナは言う

「解った……」

ニーナが口を開くよりも早く

ソウルアーミーは目の敵

生涯で最後になるであろう相手へと吠えた

「なら お前だけでも道連れにさせてもらおうか!」

突然の始まり 一発の銃声が鳴り響く

『上から!?!』

いきなり足元で地面が爆ぜる

一瞬そちらに気を取られてしまう

自分の判断と行動に嫌気がさす

視線を正面に戻した時には既に遅い

目の前には3つの弾丸

「くそっ……!!」

咄嗟に身を固めて歯を食いしばる

続いて激しい爆発と重い衝撃 全弾食らう

「痛ッ……」

早く体勢を整える 自分に言い聞かせる

すぐに次が来る 恐らく次は更に痛いだろう

「……あれ?」

予想に反して次の攻撃は来ない……? ?

何故かヤツは 呆然と立ち尽くしている

ソウルアーミーはあらぬ方向を見ていた

何処かに隠れていたのか 2機のMTが姿を現わす

『油断ですか?』

その通りだ あっさり騙されるなんてな

「当然 予想しとくべきだったな」

むしろなんで1対1だと思ってたのか

『……レーダーを見れば解った筈ですが?』

「え?」

『本当に気がついていなかったのですか? レイヴン?』

「……気がついていたら 教えてくれても良いんじゃないか?
オペレーター?」

『嫌です』

即答 しかも 強調

『自分の不手際です 押し付けしないで下さい』

戦い始めて数分 既に叩きのめされた気分

それにしても なんで攻撃してこないー…

「何故此処にいる！？ 逃げると言っただけだ！」

ソウルアーミーが突然怒声を張り上げる

それにMTの片割れが叫んだ 「一緒に戦う」と

「馬鹿な事を言っくな！ まだ間に合う！ 逃げろ！」

ソウルアーミーは仲間を逃がそうとしているのか

それでもMTは頑なにその場を動かさずとしない

『茶番ですね』

ニーナは冷たく言い放つ

こいつならそう言おうと思ったよ

まあ 確かに政府の連中も気づかれてるだろうし

今から逃げるにしても 恐らく無理だろう

「解った だが 手は出すな」

MTのパイロットが「しかし…！」と言い

だがソウルアーミーはそれを手で制する

彼はあくまでタイムマンを希望するって事が

「悪かった 不意打ちを詫びる」

ソウルアーミーはこちらに向き直り 詫びの言葉をよこす

それに思わず苦笑が漏れる 本当に固い奴だな

二ーナなんて イライラした雰囲気がちらほらしてるし

「なんで謝るんだ？ これは戦いだ 当然の事だろう？」

「……そうか解った…それと」

それと？ まだ何かあるのか？

「あの2人には手出しをさせない」

ソウルアーミーの声には 嘘も偽りの響きもない

さっきのも 彼自身にとっては予定外なのだろう

「信じてくれとは言わん」

「解った」

こいつの性格は分かった なら多分嘘は無い

『信じるのですか？』

二ーナからは 呆れ果てたような声

無表情のくせに 言葉はやけに突き刺さる

『もし嘘だった？』

「その時はその時 だろ？」

『分かりました ご自由に』

人も殺せそうな程の鋭い目だけを残して

二ーナはモニターから消えた

……もしかして……心配してくれた……？

「無いな」

すぐさま思い直す そんなタマじゃない事は知っている

大方話すのにイラついて 今頃壁でも殴ってるんだろう

「それじゃー……」

軽く首を動かす 骨が鳴る 気合を入れ直す

「行きますか！」

戦闘再開 機体を相手目指して走らせる

まずは……

「さっきの礼からだ」

そのまま突っ込む 敵は目の前

だがヤツは動かない なんだ？

そのまま 相手の左腕を斬りつける

その意図を理解して 出来るだけ浅く斬る

すぐに相手との距離を離す 仕切り直す

ソウルアーミーもゆっくりと 戦闘体勢に入る

「まったく 律義なヤツだな」

恐らくわざと斬らせたのだろう

さっきの分はこれでチャラって事が

本当に馬鹿だ が……

「嫌いじゃあ無い！」

再びソウルアーミーに向けて走る

一気に間を詰める もう一度左腕を狙う

ソウルアーミーは拡散バズーカ（ZWG - BZ / HYDRA）を構える

一瞬 嫌な記憶を思い出す 昔の戦闘

あの時の 赤い機体のアイツと同じ武器

咄嗟に上に跳ぶ 次いで発射音

3つの拡散弾が今までいた場所に着弾

「今度は素直に斬られちゃくれないか」

中空でソウルアーミーの機体を見下ろし

重力に逆らわず垂直に落下 そのまま斬りつける

頭を真つ二つに出来る そう確信するタイミング

だが速い いつの間にか真横に移動されている

「やっぱり やる!!」

ソウルアーミーの機体が右手を上げるのが見えた

緊急回避 真後ろにブーストダッシュ

直後 目の前を3つの弾丸が通り過ぎる

そのまま下がりつづけ 相手を正面に捕える

すると 何を思ったかソウルアーミーは遠くで構える

? L S ・ M O O N L I G H T ? 青い”最高”を冠するブレード

「なんだ……?」

左腕のブレードなど届くはずもない距離で左腕を振った

訳が分からない だが本能がサイレンを鳴らす

無意識に左へ跳ぶ その自分の判断が正しかったと知る

青い光刃が大気を滑るように襲いかかる

「なっ!?! 光波?!」

それは普通には出来る筈のない攻撃

前の仕事で食らったものとは威力がケタ違い

僅かに掠めただけで機体が裂ける

そして 背後の壁にぶつかり 四散する

弾け飛ぶ青い粒子が 美しいとすら思える が

「冗談じゃない!」

強固な作りをしている筈の壁が抉られている

まさか？強化人間？ だつたなんて

「こんな所まで同じか」

記憶の中で 以前戦った2体のACを思い出す

まるであの2人を合わせたかのような相手

「へヴィ…だな…」

だが驚いている暇は勿論くれなかった

マルチミサイル (ZWM - M24 / 1MU)

8発のミサイルが白煙を上げながら突っ込んでくる

思いつきりレバーを倒し 前方に向けてブーストダッシュ

ランダムに だが正確に襲い来るミサイルの間を抜ける

ソウルアーマーも それを読んでいたようだ

回避した先に向けて拡散バズーカを撃ち込んでくる

「3発食らうよりはー…!!」

覚悟を決めて左に飛んだ

歯を食いしばる 目の前に弾丸1発

バズーカの衝撃が機体を揺らす

そのままソウルアーミーに迫る

ヤツは慌てて下がる だが逃がさない！

地面を滑りながらブレードを引き絞り 突き出す！

当たる！ その確信は またもや打ち破られる

「へヴィ……」

しかも 最悪なカタチで

ソウルアーミーは全速で後退しながら

背中に折りたたまれた砲台を 立ったまま構えてみせた

通常仕様の機体では出来る筈もない芸当

普通ならその場でしゃがみ 構え 狙い 撃つ

この動作を必要とする しゃがませて機体を固定しないと

関節部分がもたずに発射した勢いで機体のほうに吹っ飛ぶ

4脚機体ならまだしも 2脚でやるとなるとリスクの方が大きい

中の人間の体ももたない 衝撃で体中の骨がどうなることか
だが それを可能にするのが強化人間 通称”プラス”

パイロットを機械化することで 機体の激しい挙動にも耐え
それ故に機体も無茶なカスタマイズをすることが出来る

機体の出力を最大限まで上げ 余りあるエネルギーは

光波と呼ばれるレーザー兵器として射出することができる

そして関節部分を強化することで目の前のソウルアーミーがやった
立ったままでランチャーを撃つなんて戦い方を可能にする

「……………この自殺志願者め！！」

だが そんな手術をした連中がどうなったか

頭をいじくりまわして 体を切り刻んで得た力

多くは手術に失敗した時点で死ぬことだったである

それでもプラス化するレイヴンは後を絶たない

ソウルアーミーもその口か 命を削って力を欲した一人か

銃弾の雨 チェーンガン (EWC - CN6400) の弾幕

が目の前を覆う

ほぼ全弾直撃 頭部の半分以上が吹き飛ば

その衝撃で後ろに吹き飛ばされる

「ヤバッ!」

運が良いのか悪いのか 外部を映すカメラだけは生きていた

それが映し出したのは 拡散バズーカを構える奴の姿

ソウルアーミーの機体が コアに銃口を向けている

その様を 頭部のカメラから他人ごとのように眺めていた

確実に迫る死 他人ではなく 自分自身の…

そう認識した途端 勝手に体が動いていた

レバーを握る

ブースターが火を噴く

機体が一瞬浮かび上がる

同時に向けられた拡散バズーカを蹴る

銃口が明後日の方向へ弾を吐き出す

片方の脚でソウルアーミーの機体の右足を蹴る

ヤツの機体が重心を崩し 前のめりに倒れこむ

迫るのは敵の心臓

コアに目掛けて

弓を射るように左腕を引き絞り

「もらった!!」

突き刺す 刺した筈だった なのに――

「なんツてヤツ!」

ソウルアーミーは 蹴り上げられた拡散バズーカを

強引に振り下ろし打撃武器として使ってみせた

そのせいでブレードの軌道が僅かに逸れる

ソウルアーミーの機体の右腕が中空に飛んだ

一瞬だけ 両者の動きが止まる 同時に機動

お互いがお互いを蹴り飛ばし その反動で距離を取る

だが体勢を立て直すのはソウルアーミーの方が早かった

距離を離すと同時に左腕を振る 虚空を斬り裂く動作

次に何が来るかは明白 切迫した頭で必死に思考する

素早く視線を巡らせる アレだ！

左手に”ソレ”を持たせる そして

ディスプレイを押す 力が背後に集まる

体勢が崩れたまま

その姿勢のまま

OBが発動する

奴の左手が青く伸びる 光波がくる

出来るか?! 出来なければ死ぬ！

迫り来る光波 それに向けて左手のモノを投げつける

ソウルアーミーは驚嘆に目を見開いて声を上げた

投げつけたソレは奴の右腕 斬り落とした右腕を光波にぶつける

火花を散らして腕は文字通り爆散した 煙の中に だが青い光

それでも光波は生きている そのままの勢いで迫る

その光波に振り上げた左腕 ブレードを叩きつける

青と青の衝突 同等のエネルギーによる相互干渉

一瞬 お互いの光が消える

その間を抜ける そのまま奴に迫る

ソウルアーミーはすかさずブレードで迎え撃つ

横に薙ぐように腕を振るう だがそれじゃ遅い

左腕が伸び切る直前 右手で奴の左手を押え込む

そのままブレードを引き絞る

弓を射るように 狙うは心臓

ソウルアーミーの乗るコックピット

殺す その意思は光刃のカタチ

そして叩きこむように突き入れる

…………… 静寂

直後にそれを破る破裂音

それは 光波が散り消えた音

コアを突き刺した

普通の人間なら確実に死んでいる

お互いのブレードが光を失う

お互いに立ち尽くす

「……聞えるか？ レイヴン」

ソウルアーミーはまだ生きていた

なんて生命力 プラス化の技術に改めて驚く

「ああ 聞こえてる…大丈夫か？」

そんな筈はない ソウルアーミーが血を吐く

恐らくは内蔵はズタズタ 人の形を残してるのが奇跡

「…いや…正直…もう…ダメだ…」

「…すまない…手加減は出来なかった」

自分の言葉に嫌気をさす

手加減なんてする気もなかったくせに

それどころか 心底戦いを楽しんでいたくせに……

「…………馬鹿を…言え…」

だが 帰ってきたのは感謝の言葉だった

「…最後に…最高の戦いが…出来た…感謝する…」

「…………そうか」

「そつだ……………」

沈黙

「…………そつ言えば…聞きたいことが…あつたんじゃないのか…？」

「…………え？」

ソウルアーミーの言葉に首を捻る 一体誰に向かつて…………？

「…………聞きたいことが…あつたんじゃないのか…？」

いつの間に繋げたのか ソウルアーミーが驚く

しかもタイミングとしてはこれ以上ない

再びニーナが回線を開いていた

『一つ お聞きしても宜しいですか？』

「……………ああ」

『貴方は火星に行った事がありますか？』

「……………火星？」

その問いに ソウルアーミーは頭を振った

「……………いや……………一度も……………無い……………」

暫くの沈黙 伏目がちに頂垂れるニーナ

『解りました ありがとうございます』

それだけ言うと ニーナは回線を閉じた

ソウルアーミーは深く息を吐くと 思わず苦笑

死に際に 変な女に会ったものだと言っていた

……………また ” 火星か ”

ソウルアーミーが誰と話していたのかソレで分かった

恐らくニーナだ ソウルアーミーの回線を強引に繋げたのか

ニーナは前も同じことを 別のレイヴンにしてたのを思い出す

「……………レイヴン」

ゆっくりとした声で　だが苦しそうに咳き込みながら

ソウルアーミーは呼びかけてきた　ソレに答える

どうやら話しは終わったのだろう　今回もハズレだったのか

「頼みが…ある…」

「頼み？」

「…ああ…依頼…だ」

ソウルアーミーの次の言葉は

多分思ってるのと同じだろう

「…あそこの…二人を…逃がし…て…欲しい…」

やはり　だがそれは　政府を敵に回しかねない

どう考えても　かなりキケンなミッション

小さなコールサイン

ニーナがモニターに映る

口を開こうとして　ソレを手で制する

これを受けるのは　どう考えても利口じゃない

分かってる 分かってるさ ニーナの言いたい事はな

「受けるよ」

でも だからなんだ 初めっから利口だと思っちやいない

「…すまん…」

心底安堵したと 力の抜けたソウルアーミーの声

「……依頼料…は…」

「ああ 大丈夫」

機体を動かし 手近に落ちていた拡散バズーカを拾う

「コイツをもらってくよ」

ニーナが小さく『バカですね』と呟いた

「……解つ…た」

声が震えていた 多分笑っていたんだろう 恐らく苦笑

次いで大きく咳込む ああ そろそろか……

今まで何度も見てきた光景 人の死に際

「…最後に…お前と…戦えて…良かったよ…」

「……ああ」

「……ありが……と……」

それがソウルアーミーの最後の言葉

4人の人間に看取られながら

また一人 レイヴンが眠りについた

……さあて 残った仕事をしようか

拡散バズーカを手に 2機のMTへと近寄る

まだ弾はある

「悲しんでいる所悪いけど……」

MTに銃口を向ける

そして迷いなく

引き金を 引く

「……ご苦労だった レイヴン」

依頼主である政府の男は 安堵の表情

「今回の目標であるACの方は 先程確認した」
だが と 少しの間を置き

「MTの方には操縦者はいなかったが……」
それに心のなかで舌を出した後で

「逃げたんじゃないか？」

ニーナが冷たい目を向けていた

「恐らくな だがまだこの中にある筈だ 全力で探しだす」

何も言わずに ただ肩だけを竦めてみせた

「……ところで」

依頼主は 視線を右手に持つ拡散バズーカに向け

「その銃…来る時に持ってたかな？ 持っていなかったような……」
「？」

「気のせいだろ？」

内心冷や汗を流しながら 男の言葉を流してやる

まだ納得しないのか 依頼主は一人で唸っていた

「まだ何か仕事があるのか？」

「いや もう用は無い」

「解った それじゃ今度また何かあったらよろしく」

「ああ 解った その時は頼む」

「了解」

事後処理で忙しいのだろう 依頼主はさっさと踵を返す

さあて 帰ろうか まだ終わらせなきゃいけない依頼がある

セントラルオブアースのほぼ外れ

” サテライトシティ5 ”

帰り道の郊外で ACを載せたトレーラーを止める

「生きてるか？」

そこに積まれた拡散バズーカの中から

2人の男がのっそりと現れる

その男たちは さっきまでMTに乗ってたふたり

「早く行けよ」

だが 男たちは立ち去ろうとせずじっと睨みつけてくる

まあ 無理もない 言ってしまえば仲間の仇なんだから

向こうが行かないなら 踵を返してトレーラーに戻る

「……今度」

不意に 男の一人が言った

「今度 仕事を頼む」

それに振り向かず 右手を上げて答える

「……ありがとう」

後ろで砂を蹴る音 足音が徐々に遠くなる

これで依頼は完了 後は帰って寝るだけ

『危ない真似をしますね』

トレーラーの中 ニーナからの通信

「ん？」

『もし見つかったら どうするつもりだったんですか？』

……ああ それは考えてなかったな

「さあ？ どうしたんだろっなあ」

『本当に 愚かですね』

うわっ ついに馬鹿を通り越したか

「ヒドいな……」

シートに深く身を沈ませて 少し目を閉じる

陽の光が温かい 木々が風に揺られる音

ああ このまま寝ちまいそうだ……

「この後は 流石に仕事は無いんだろ？」

『はい』

「それじゃ 久しぶりにのんびりしようかな」

んーっと カ一杯伸びをする

そこに不吉な音 メール到着音

『……………レイヴン』

「悪い それ以上は聞きたくない」

『ホテルで休んで下さい』

耳を塞ごうかと両手を上げて そのまま固まった

なんだ？ ホテルで休め？ 仕事じゃないのか？

『政府で指定されたホテルで休んで欲しい との事です』

ますます意味が分からない 何で政府が出てくるんだ？

「なんで？」

だが 勘が囁いている 限りなく嫌な予感がする

『いつでも 連絡が取れるように』

「……………だからなんで？」

そしてニーナは 相変わらずの無表情でありながら

珍しく冷たさ以外の感情を言葉に滲ませたくれた

『先程の騒ぎで 要人が一人誘拐されました』

それは哀れみの声 いつまでも耳に響いた

ホテルの一室

薄明かりの部屋の中

する事も無く ただ眠る

? セントラルオブアース襲撃?

誰にも知られずに始まり そして

誰にも知られずに終わった事件

アレは陽動だったんだろうか

セントラルオブアースで騒ぎがあった時

別な場所で政府の要人が拉致された

あの日から2日が経つ

だが要人の行方はようとして知れない

今も必死に探しまわっているのだろう

だが皮肉にも 要人の行方が解らないおかげで

こうして怠惰を貪る事が出来る

「……にしもて…暇だ」

とりあえず 外出の許可くらいは出ないかな

いくら早急に連絡を取りたいとは言え 外出不許可ってのは

二ーナからその事を聞いた時には流石に引いた

こんなに束縛されると 早く見つかって欲しいような

もう少し休ませて欲しいような 複雑な心境

どちらにせよ 今は待つしかない

「……ち……ちくしょう……!!」

空が赤く染まる 夜が近い

何処までも続く平原

響き渡る絶命の叫び

バロウズヒル 17:55

白い機体が黒煙を上げて沈む

それを見下ろす純白の機体

コールサイン 次いで女の声

『終わった？』

「ああ」

『ねえ クライツ 今回の依頼って何だったの？』

「さあな」

突然の呼び出し 気になる名前 結局聞けずに終わる

「今から戻る……いや」

リーダーにACの反応

『まだ 終わってないみたいね』

突然現れた機体は 迷う事無く真っ直ぐに向かって来る

「所詮捨て駒か……まあ いい」

向かってくる機体は 吐き捨てるように呟いた

予想通り と言う響きが言外に混じっている

「こちらディアハンター 作戦通り目標の排除を開始する」

作戦 そう 全ては仕組まれた茶番劇

特に何の感情も現わさない 何時もの事

相手を敵とみなし クライツも迎撃の体勢に入る

止まる気配の見せないACに向かって ブーストダッシュ

まず仕掛けたのはディアハンター

轟音が響き渡る そして迫る火球

それをクライツは 僅かに右へ移動して回避

今の砲撃 恐らくハンドグレネード（EWG・HC・GN210）

クライツは 速度と音だけで相手の武装を推測する

怯んだ様子も見せず そのまま相手に突っ込む

ディアハンターの右手から炎が吐き出される

またも ハンドグレネードの火球が襲い掛かる

土煙が舞う 直撃させたとディアハンターは確信

だが 着弾地点には残骸どころか影すらない

火球が放たれる直前 クライツは上空に跳んでいた

相手を飛び越し空中で向きを変える 銃を構える

狙ってから撃つまでの速度が尋常ではなく速い

そして放たれる針のようなレーザー

爆発もせずに小さな穴を穿つ

ディアハンターの動きが止まる それもその筈

確実にリーダーとカメラのみを破壊してみせた

目を失った相手は訳も分からず呆然と立ち尽くす

何故か離れた位置でクライツもしかやがみ込むと

徐に背中の筒を構える グレーネードランチャー（EWC・GN・

81）

爆風が舞う 恐ろしいほどの熱が相手を焦がす

吹き飛ばされた機体は 脚部のみが無くなっていた

純白の機体が 戦意と脚部を失った機体に歩み寄り

そして 右手の銃を相手のコアに向けて突きつける

「生きているな？」

その声は 冷たさを伴う無感情

「貴様……!!」

ディアハンターは悔しさに己の唇を噛み千切る

自分が生かされたのだということを理解していた

グレネードランチャーで脚のみを吹き飛ばす技術

まるでスナイパーライフルでも扱うような正確性

それを目の前の男はやってのけた 絶対の実力差

「答える」

だがクライツは相手の感情など構わない

ただ淡々とした口調で質問するだけだった

「あの名前 どこで聞いた」

それは クライツに送られたメール

そこに書かれていたのは一つの名前

クライツが消した筈の 殺した筈の過去

正確には 名前なのか 記号なのか

クライツにもディアハンターにも解らない単語

「……AIN」

ディアハンターは鼻で笑い飛ばす

「知らんな この名前を出せばお前が来る

確かに依頼主の言った通りになったって訳だ」

釣り餌として その言葉は使われた

そしてその通り クライツは姿を見せた

だが予想外だったのは クライツの実力が

ディアハンターのそれを大きく凌駕していたこと

「……依頼」

自分に恨みを持ち かつ AINと言う単語を知る者

クライツは 自分の保持する膨大な情報の中から探す

だが 心当たりはあるが 手がかりが無かった

クライツを殺したがる人間など数多いが

AINを知るものなど 自分を含めて知らなかった

…… たった一人を除いては

「お前の依頼主は誰だ？」

ディアハンターの答えはクライツにも分かっていた

それでも聞いたのは それだけ情報が無い事を意味する

「貴様もレイヴンなら 答えは解っている筈だ」

「……そうか」

もう用は無い そう言うかのように

クライツは銃の引き金を引いた

レーザーが ディアハンターのコアを貫く

あとは音も無く 動く事も無い

『お疲れ』

ミコトが短く労いの言葉をかける

『この後はどうするの？』

「調べたい事が出来た」

『調べたい事?』

「ああ」

「……解った それじゃ」

ミコトは暫く考えて

「依頼が来たら連絡するわ それで良い?」

「頼む」

『ん それじゃ』

それだけ言うと ミコトは消える

クライツも 振り返ること無くその場を後にした

既に夜の帳は下り 辺りは闇に包まれる

哀れな鉄の塊2つを 抱くかのように

【You've got a Mail】

『レイヴン 仕事です』

「……了解」

21:20

セントラルオブアース

サテライトシティ4

寝静まるには 若干早い時間

だが この区画だけは静まり返っていた

それだけではない 人を寄せ付けぬ緊張感が満ちている

『拉致された要人が発見されました』

機体に取り込み 久しぶりに聞いたニーナの言葉はそれだった

『犯行を行ったのは インディーズ』

「インディーズか 男を誘拐とは趣味が悪いな」

『追跡の途中で気付かれ サテライトシティ4に逃走』

一応 尾行はしたらしいがバレたのか

『現在要人は 盾として使われているようです』

「役に立つのか？」

『一応は』

「それで？」

『救出して下さい』

「暴れば良いのか？」

『隠密行動です』

「だろうな」

『拉致された要人は 乗っていた車両の中との事です』

「一人で？」

『爆破装置と一緒にです』

「そいつは楽しそうだな」

『心臓には悪そうですが』

「それで？ どうすれば良い？」

『簡単な事です 誰にも見つからずに敵を殲滅して下さい』

「簡単………ね」

『楽しそうですね』

「心臓には悪いがな」

『依頼の内容は 以上です』

「待った 敵の数は？」

『知りません』

「上等」

『それでは お願いします』

辺りは闇に包まれ こちらの姿は見えない筈

同様に こちらも向こうの姿を見つけるのは難しい

しかも敵の数が解らない

となれば 下手に行動する訳にはいかない

だったら 取るべき方法は限られてくる

「まずは上から かな」

ペダルを踏みこむ ブースターが唸る

機体が徐々に持ち上がる

そこにコールサイン ニーナが言った

『一応言っておきますが』

「ん？」

『上空に上がると見つかりますので』

慌ててペダルから足を放す

「わざとか？」

『被害妄想ですか？』

「……………」

『そうですね』

遅めの警告を残し ニーナは通信を絶つ

「仕方がない レーダーのみで頑張ろう」

まさかステルス装備で固めてるわけじゃなし

初めからこうすりゃよかったかな

さっそくレーダーに目を移す

敵の姿が赤い光点として表示される

……………ちょうど自分の真後ろに

「なっ?!」

後ろを振り返る　ほぼ同じタイミングで敵も振り返った

ちょうどお互い目が合った……気がする

「……………レイ……………!」

叫びだそうとする敵に向け

左腕を弓を射るように引き絞る

「いいから　黙ってる」

MTの操縦席辺りにブレードを突き刺す

極力爆発を抑える　無音による殺傷　（　S i l e n t　K i l l
i n g　）

思わず深いため息　冷や汗を拭う

まったく　幸先の良い事だ……

ブレードを引き絞り　突き立てる

音もなく敵MTはその場で絶命する

これで4機目

「あと何機いるんだ」

リーダーを見る 表示されている光点は2つ

ちよつと向かいのビルの陰で足音が聞こえた

音とリーダーの示す方向は同じ 次はコイツか

不意に敵MTは歩みを止める 周りを警戒中か

「何をしている?!」

MTの男が叫んだ 一瞬 体が跳ねる 周りを見る

見つかった訳じゃ無い じゃあ 誰に向かつて……

「ヤバッ」

MTの男が叫んだ先には さっき仕留めた残骸が立ち尽くしていた

このままだとバレル

建物の陰から飛び出す

「オイ! 返事を……!!」

どうやら 返事が出来ない事を確認したらしい

「大変だ! ここに侵入者が……」

MTの背後から 引き絞った左腕を叩きこむ

だが今回は失敗した 断末魔の悲鳴が響く

「どうした?! 誰だ貴様!!」

ちょうど真正面 ビルの影から出てきた1機に見つかる

『見つかったようですね』

二ーナの冷たい声 呆れた響きも含まれていた

「そつみただいな」

ディスプレイに手を伸ばす 押す

「レイヴン……!!!?!」

MTの男が声を発するよりも速く

OBで一気に間合いを詰める

引き絞った左腕を叩きこむ

「お喋りは嫌われるぞ」

一瞬かき乱された夜の暗幕

だが すぐに静けさを取り戻す

MTは火花を散らして 男は命を散らした

ようやく 一息つく

『楽しめましたか？』

「いや 全然……」

今回は見つかったら要人が死ぬだけに下手が出来なかった

何度か冷や汗もんの場面もあつたし 無事に終わって良かった

不意にコールサイン ニーナとは別に通信が入る

『レイヴン』

政府の通信士からのようだ

『こちらでも 目標の全滅を確認した』

これより人質を保護する すごく苦労だった』

どうも と返す 短い応答 通信は切れた

『やっ……と』

いつものように首を揉みほぐしながら

このあと何しようかと考える その結果

「とりあえず 寝るか」

『……眠ってばかりですね』

いや 夜だし と言うかまだニーナがいたことに驚いた

「なんだ？ 暫く会えなくて寂しかったのか？」

茶化すように笑いながら言ってみた

『永遠に会えなくても構いませんが？』

久しぶりに聞いたキツイセリフに安堵する

ああ 割りとニーナと会話するのは嫌いじゃないんだな

そう思った後で 一瞬 自分はDMなんじゃないかと心配した

『それでは お疲れ様でした』

それだけ言うと ニーナはいつも通り消えた

気がつくとも 辺りは来た時よりも喧騒に包まれている

救助の連中が到着したのだろう 彼らの夜はこれからのようだ

「お疲れさん」

モニターの向こうへ 言葉を送る

要人拉致事件から明けて翌日

良く晴れた正午 12:15

コンコード本社

オペレーターとして多くの女性が働いているだけに

清潔感のある 綺麗な造りをしている

そんな中 何故か人の少ない場所が一つ

そこは食堂

ちょうど昼時 普通なら人々で溢れている筈だが

ここ コンコード社の食堂は違う

今もテーブルが3つか4つ まばらに埋まっているだけ

ここでは これが当然の事

何故なら レイヴンに昼や夜など関係が無い

そんな中 一つのテーブルを陣取る3人の女性

「アンタ ちゃんと野菜も食べなさいよ」

と ショートカットの気の強そうな女性が言う
恐らく男性よりも 女性に慕われそうなタイプ

「今食べようと思ってんだよ！」

言われて頬を膨らませて拗ねている

ツインテールの幼い顔立ちをした女性

……女性と言うよりは 少女と言う方が適当か

その隣に ストレートロングの落ち着いた

まるで氷像の様な冷たい印象をもつ美女

もしこの場に男共がいたのなら

確実に目はこの3人に釘付けになっていたであろう

そんな 見目麗しい女性達の昼食の話題は

【レイヴンの存在意義について】

……とても昼食時にする話題とは思えない

そもそも 何故こんな話題になったのか

それは彼女の この話しがキツカケだった

「ねえ ミコト ニーナ 聞いてよ……」

ツインテールの少女が思いつめた表情で口を開いた

「ん？」

ミコトと呼ばれた女性は サラダをフォークで突き刺し

「なんですか？ サラ」

ニーナは少し微笑みながら

ツインテールの少女を優しい眼差しで見る

「ロウさんってば また無駄使いしてるんだよ」

そう言いながら サラは目の前のおかずを弄ぶ

「飯が食べられない！ とか言ってるし……」

おかずはほとんど 原型を留めていない

「このままじゃ ホントに餓死しちゃうよ」

こんな何気無い（？）会話がだんだん大きくなり

「なんでレイヴンは存在すると思う？」

「……今や こんな事になっていた

「誰かが必要としているからでしょう」

模範的と言つか当たり前の解答をニーナが返す

「それは当然ね 例えば……企業 政府」

そう言いながら ミコトは指折り数えていく

「彼らがいるおかげで 助けられていると言つのは事実ね」

「その裏で 誰かが死んでいる事も事実です」

そう言ったニーナの瞳に 悲しみの感情が浮かんだことに誰も気付かない

「それも事実ね…ならやっぱり レイヴンは不要な存在だと思う？」

「残念ながら そうとも限らないと思います」

ニーナが本当に残念そうに答える

「レイヴンがいなくとも 争いは起こるでしょう」

それに と ニーナは言葉を続ける

「レイヴンがいるおかげで 早く終わる争いもあります」

これまでの歴史が それを証明しています と付け加えた

「ねえ」

ふたりの話しを上の方で聞いていたサラが

ミコトの服をチョンチョンと引っ張る

「ん？　どうかした？」

「レイヴンって　いつからいるの？」

「……いつから？」

サラに問われたミコトは　とりあえず数秒考え

すぐに考えるのを諦めてニーナにパスを出した

「詳しくは解っていません　ただー」

以前読んだ　資料の文面を思い出しながら

「今から約134年前に起きた最終戦争

一般に？大破壊？と呼ばれる戦争の後から

というのが定説だったと思います」

「確か　？30年戦争？の時には　ACはあった筈よね？」

「ええ」

「100年前も　ここみたいな所なかったっけ？　確か……」

と　自分達の務めるコンコード社を指差す

「？レイヴンズ・ネスト？」

「そうそう！　よく覚えてるわね」

感心したような　呆れたような顔のミコト

「ねえ……」

「ん？　今度はなによ？」

ミコトの服の裾をクイクイと引っ張りながら

サラが上目遣いでミコトに質問を飛ばす

「？30年戦争？つて　なに？」

「……はあ?!」

ミコトは深いため息を吐く

「？大深度戦争？と言えば　解りますか？」

代わりに　ニーナが答える

「……あつ……あぁ……解ったよ！」

そう言いながらもサラの目は泳ぎまわっていた

ニーナは微笑みながらサラの髪をいじり

ミコトは深い深い溜息を漏らして言った

「……サラ」

「え？ なに？」

「もうちょっと歴史の勉強　しようね」

哀れみの目を向けながら　ミコトは静かに言った

サラは泣きそうな顔をしながら

「ニーナとミコトが頭良すぎるんだよね」

それを聞いた2人は

「普通です」

「普通です」

「ハモリながら言う事無いじゃないかあ」

サラはまたしても拗ねていた

「でも　不思議ですね」

隣で拗ねているサラの髪をいじりながら

ニーナは何事も無かったように話しを続ける

「なにが？」

「いえ？強化人間？の技術は 大破壊以前の技術ですよね」

「その筈だけど」

「ならば何故 ACにその技術は使えるのかと思ひまして」

「んー…確かにね」

「大破壊以前にも ACのような兵器はあったのでしょうか」

「あつたんじゃない？ MTがあるくらいだから」

そう言いながら 窓の外を指差す そこには警備用のMTが立っていた

「強化人間の技術を売り出したのって

昔の？ジオ・マトリクス？って言う話しは？」

コーヒーをスプーンで掻き混ぜながら ミコト

「？ムラクモ・ミレニアム？ですね」

一般には知られていない情報を 当たり前のように語るふたり

レイヴンに関われば自然と知るようになる 特に担当が担当なら尚更

「？ムラクモ・ミレニウム？が対抗していた最大企業？クローム？も

知っての通り 最後は共倒れしてしまったようですが」

「それは知ってる 確かレイヴンズ・ネストもね」

「でも」と ミコトは首を捻りながら続ける

「その理由って 不明の筈よね？」

「ええ ですが……」

ニーナは何かを思い出しながら答える

「一人のレイヴンが関わっていたと 聞きました」

ニーナのその一言に ミコトの表情が少し変わる

「……聞いた？ 誰から？」

暫し 奇妙な沈黙が辺りを包む

ニーナはミコトと目を合わせず

伏し目がちにカップを持ちながら

スプーンで紅茶を掻き回していた

「……………まっ 良いか」

場の雰囲気や和ませるように 背伸びをしながら

このサバサバした性格も ミコトの魅力なのだろう

そんなミコトの服の裾を またしてもサラが引っ張る

「ん？ どした？」

「…ねえ ACとMTって 違うの？」

カチャンと ニーナの手からスプーンが落ちた

ミコトは背伸びの途中で動きが止まる 瞬きすらしていない

「……………サラ アンタそれ本気で言ってる？」

やっとの事で絞り出した声で ミコトは問い掛ける

「…あ…あはははははは…」

サラはバツが悪そうに笑って誤魔化していた

深いため息を一つ吐き やれやれと説明する

「簡単に言うと MTは作業用 工事とかのね

んでMTのパーツを交換できるのがAC 解った？」

ミコトの言葉には 僅かに怒鳴り声にも似た響きが混じる

「うっ……うっ……」

サラはよく解っていないのか 唸り声を上げて答えた

「もう少し詳しく言つと……」

そんなサラに 優しく説明をしてやるニーナ

「大破壊後 ? クローム? ……今の? エムロード? が先頭に立ち

? 100年計画? と言う地下都市開発計画を発案・実施していきます

その計画を行うための作業用ロボットとして

MT (Muscle Tracer) が造られました

その後 MTの胴体部分を中心にパーツを交換できるMTが開発されます

それをCMT (Cored MT) と言います

そのCMTを武装させ 戦闘用に強化されたモノを

AC (Armored Core) と呼ぶようになったのです

「へえー」

「へえー」

「……ミコト？」

「あつ やつ 普通はそんなに詳しくは知らないって」

焦りながら答えるミコトを サラがジト目で見上げる

「そうですか？」

特に何の表情も浮かべずに ニーナはそう答えた

「ところで 何の話だったっけ？」

ミコトは思い出したかのように ニーナに聞く

「確かレイヴンの存在意義について だと思いましたが」

「ン ムシヤムシヤ」

「そうそう それで どう思う？」

「……どう と言われましても」

レイヴンが何かの意味を持って存在する限り

それは 必要な事なのではないでしょうか」

「ハグハグン」

「何かの意味って？」

「そうですね……」

「パクパクン！ンン！！」

「……………」

「……………」

「ぶはあ」

「ぶはあ じゃない」

ミコトはジュースを飲み干したサラの頭を叩く

「イッタイなあ！叩く事ないじゃないか！」

「ほら！サラも何か意見は？」

「……………意見って……………何の話し？」

「かああ！なんにも聞いてなかったのかこの娘は！」

「うん 全然」

無邪気に答えるサラの頭を

ミコトがまたしても軽く叩いた

「い〜た〜い〜よ〜!!」

ほとんど涙声でニーナにしがみつく

「よしよし」

そう言いながら サラの頭を優しく撫でる

今のニーナの姿を担当のレイヴンが見れば

目を丸くして驚き卒倒しかねない

溜息をついてこめかみを揉みながら

「レイヴンはいても良いか いない方が良いか

っていつ話ししてたの！ サラはどっち？」

まったく サラには甘いんだから…… とミコト

「えっ?! ロウさんはいないと嫌だよ！」

「いやそう言う事を聞いてるんじゃないんだけどね」

「違っの?」

「……もういいわ」

いちいち説明するのも疲れたミコトは

溜息を吐いて 力無く諦めのセリフ

「まあ 確かに私もあの人がいなくなったらツマライかも」

と ミコトは自分の担当の無口で無表情の男を思いながら呟いた

「それで ニーナは？」

「……………別に どうでも」

結局【レイヴンの存在意義】から【担当レイヴンの存在意義】に話
しが変わる

「ふーん……………ニーナの担当のレイヴンってどういうー……………」

「バカです」

即答 しかもミコトが言い終わる前に返答

「うわぁ」

その早さと言いつわりっぷりにサラが思わず引く

「……………た…例えば？」

聞いたミコトの顔を睨みつけるように見つめながら

「すぐ騙される 甘い 寝起きが悪い 人の顔を忘れる 壊れる

以上です」

「……………へ…変な人なのね」

引き笑いでミコトは そう答えるしか出来なかった

「…ミ…ミコトの方は？」

少し怒っている様な雰囲気になったニーナを見て

早く話題を変えたいのかサラがミコトに話しを振った

「えっ？ 私？」

突然話しを振られて ミコトは少し焦る

「そうね……………クライツは……………」

少しばかり考えて

「レイヴンらしいレイヴン……………かしらね」

サラがよく解っていない顔をする

「無駄なく確実に仕事をこなして

余計な事を一切しない 例えるなら……………」

と まだ少しご立腹に見えるニーナを指さして

「ニーナを男にしたような感じ かな」

「あつ なるほど！」

何故かサラが酷く納得し 何度も相槌を打つ

ちなみに当のニーナは 黙々と食事を進める

「サラの方は？」

ん？ と顔を傾けてから サラは満面の笑みを浮かべ

「んと…楽しい人！」

それに今度はミコトが僅かに首を傾げて聞く

「面白い？ 例えば？」

「えと…お話とか 遊んでくれたりするよ！」

「遊ぶ？ いつ？」

「お仕事中… あつ その前かな」

「……はあ？」

訳が分からないと ミコトは眉を寄せる

「数当てゲームをするの」

「数当てって……何の数？」

「えっ？ 敵の数だけど？」

流石にこれにはニーナも食事を中断する

「敵の数って……ACにリーダー積んでるでしょ？」

「うんうん持ってないって」

サラは首を横に振って否定のジェスチャー

ミコトは更に訳わからんと サラに詰め寄る

「じゃ……じゃあ……サラはリーダー見てるんでしょ？ 意味あるの？」

「リーダーの見方なんて解らないよ？ だから大丈夫」

「……大丈夫じゃないわよ……それ」

今日も何度目かの深いため息を吐く

サラと会話すると溜息ばかりのミコト

「普通はリーダーで状況を教えるものなの 敵の数とかね ねえ
ニーナ」

と ミコトはニーナに相づちを求め る が

「いえ？」

余裕で否定の言葉が返る

「アンタらねえ……」

すでに反論する気も失せていたミコトであった

「……でも 面白そうよね それ」

と ミコトまでとんでもない事を言い出す

だがすぐに 「ああ 意味ないわ」と ミコトは頭を振った

「良く考えたら あの人の勝手にやってるんだった」

たまに聞いてくる事はあるけど 全部自分で処理してるし……

そう考え そう言えばあんまり教えた事無いな と思い出していた

「じゃあ 意味無いか……」

と つまらなそうにミコトは呟いた

その隣で目を光らせている人物が一人

「面白そうですね」

不吉な事を呟く二一ナ

「ん？ なんか言った？」

「いえ 別に」

ミコトの問いに しれっとそう答える

誰も気付いていないが 実はこの場合

【レイヴンの存在意義】を考えるより

【オペレーターの存在意義】を考えるべきなのだが

そんな事を考える人間は この場には一人もいない

3人とも 割りと良い性格をしているのだ

とりあえず この時点で1人の男が更なる悩みを抱えた

それだけはハッキリしている レイヴン達の苦難は続く

- Mission 6 - Party Piece

午後1:00

ソーンガーデン

ヒルダ廃棄施設

「…い…生きてる…嘘みたいだ…」

出口の光を見て 自分が生きている事を実感する

「生きてるって 素晴らしい………」

今まで色んなトコで戦ってきたが

今回ほど死ぬと思ったことはない

こんな事を言うのは決して大袈裟じゃない

それは機体の損傷具合がよく物語っている

いや 機体と言うよりは鉄屑と言った方がいい

それほどまでに破壊し尽くされている

小さくコールサイン

『おや?』

そしてすっとぼけた顔のニーナ

今ごろ出てきても遅いつての

『仕事は終わりましたか?』

何をいけしゃあしゃあと……

『どうかしましたか?』

「……ニーナ」

『何か?』

「あの張り紙は何だ?」

『ああ……』

その事が そんな感じの応答

『ご馳走様でした』

「チガウ」

『今日の昼食はハンバーグでした』

「そうじゃなくて」

『では 何ですか？』

「さつきから 何度も呼んでただけど」

『それは気付きませんでした』

そりゃそうだ 飯食いに行つてりや分からんだろつよ

「……まったく こつちはそのおかげでボロボロだ」

ブツブツと愚痴を聞かせてやるが

ニーナは全く話を聞いちゃいない

「……もういい とりあえず昼にする」

駄目だ この女は話を全然聞きやしない

止めよう 疲れるだけだ 今は飯を食おう

先程の戦闘でクタクタな体と

それ以上にボロボロの機体を引き摺っていく

小さく着信音

今の不吉な音は聞かなかった事にする

『レイヴン』

ニーナの声を全力で無視する

『残念ですが昼食は無しです』

構わず出口へ向かって機体を進める

『今 貴方の後ろに居ます』

「……ハイ？」

あまりにニーナの言葉が意味不明だったため
無視しようと思ったのに返事をしてしまう

「後ろ？」

不意に背後で音がした

確かに背後に？何か？いる

ギギギギッと まるで鳴き声

これって…もしかして…

勢い良く振り向く そこには――…

「ウン……だろ？」

人の5倍以上は有りそうな

いや確実にあるノミのようなイキモノ

つい先ほど戦ったばかりの昆虫が

無言で見つめてラブコールを送ってくる

ほとんど反射だけでブレードを振っていた

斬りつけると同時に後方に全力で離脱する

同時に虫が爆ぜた

例えでも何でも無く まさに爆発した

初めは愕いた それはそうだろう

虫が爆発って あり得ないだろ

「なんでまだ残ってるんだ?!」

『その事について依頼が来ています』

「……どんな？」

いや 聞くまでもないんだけどね

『要約すると 貴方がいる？ヒルダ廃棄施設？の奥には

先程の生物兵器がまだまだ沢山いる 頑張れとの事です』

「マジデスカ」

『はい 頑張つて下さい』

無感情で言われても……

溜め息一つ 昼食が遠のいた

「……解つた 機体を変えたらすぐ取り掛かる」

それから40分後

再びヒルダ廃棄施設入り口

「それで？ 中には何匹虫が残ってるんだ？」

ニーナへの問いかけ だが答えなんて期待してない

だったら聞くなと言う感じだが それも変じゃないか？

オペレーターなんだから答えろって感じだが……

『そうですね 勘ですが……』

だが意外にも ニーナは口を開いた

……ん？

「ちょっと待て 勘ってなんだ」

『勘です』

フザケルナヨ

「勘って何だ?! 勘って?!」

『私の勘は当たります』

「そつ言つ事じゃないだろ?!」

勘勘言い過ぎて訳が分からん

『ですがレイヴンの中には オペレーターの助言も

レーダーも無しに 勘だけで仕事をこなす人もいるようですが?』

「……そんなバカと一緒にしないでくれる?」

コックピットの中で盛大なクシヤミ

「ッあああ!! チキシヨウ!!」

『うわああ!!』

機体の中で居眠りをしていたロウが

突然大声でクシヤミをして飛び起きた

その寝顔をモニター越しに見ていたサラも

驚きのあまり大声を上げる

『いきなり叫ぶなあ!』

「おわっ!」

今度はサラの大声にロウが驚きの声を上げる

『どうしたのさ? 風邪?』

まだ少し驚いているのか 語尾が荒い

「あれ……? サラ?」

まだ寝惚けているのか 目の焦点が合っていない

『あれ? じゃないよ! びっくりしたんだからね!』

頬を膨らませて怒るサラに ロウは「ごめんごめん」と

苦笑を浮かべながらなだめようと頑張っている

「いやあ 誰かが悪口でも噂してたんじゃない?」

鼻を嚙りながらロウ それを見て

『汚いなあ』と しかめっ面のサラ

今度は風邪ひいたのかなと心配していた

「サラ 何か言った？」

『ボクは言わないよ ニーナじゃないんだから』

いやだなあ と手を振りながらサラは答える

「ん？ ニーナって誰よ？」

他の女性の名前に反応したロウに

サラは少しばかりの嫉妬を覚え

『ロウさんは知らなくてもいいの！』

自分で振った話なのに サラは何故か怒っていた

「はいはい」

そんなサラの子供っぽい仕草を微笑ましく思ったのか

ロウは軽く笑っていた 傍にいたら頭を撫でていたかもしれない

「まあ 俺の噂をするのは見目麗しいレディくらいなもんだ」

狭いコックピットで伸びをしながら軽口を叩く

『だーかーらー　ボクは何も言っていないって』

もめ　と言う感じで　手を振りながら言う

ロウの動きが止まる

『ん？　なに？』

止まる　と言うより固まっている

『なに？　この沈黙？』

突然首の運動を始めるロウ

『もしかして無視？』

首に手を回しながら何度も首を回す

そのたびに　ゴキゴキと鈍い音を鳴らす

『まだ来ねえのか？』

『ねえ！　無視でしょ？！　ねえ！』

『さっさと終わらせてえ』

『こらあ！　無視するなあ！！』

『ん？　あれ？　サラ？』

『無かった事にするなあ!!』

どこまでも ほのぼのとした光景であった

「それで？ まだお客さんは来ねえの？」

ロウの問いに そっぽを向いてサラは無視

「おーい サラちゃん」

『ふんっだ!』

完璧に怒らせたらしい ロウは頭を掻いた

「おーい 可愛いサラちゃん」

ぴくっと サラの耳が動いた

「あれえ？ 美しいサラさんはいないのかなあ？」

次に鼻がぴくぴく動く

『ほ……ほんとに?』

釣れた！ ロウは心の中でガッツポーズ

サラは横目だけ向けてロウに聞き返す

『可愛いって言うの……』

「おお！ モチロン！」

ロウの答えに サラは本当に嬉しそうな顔をしながら

『よし！ 許してあげよう！』

サラ 彼女はかなり単純な娘らしい

「それで ウツクシイオネイサマ まだ連絡無し？」

『なんでカタコトなのさ』

どこまでもサラをからかうロウであった

午後1：40 バルバスシティ

極北に位置するこの場所は 宇宙へ出るための主要都市とも言える

すぐ近くに惑星間移動の要でもある軌道エレベーター

?ラプチャー00? が存在する

全てはここから 火星への輸送が行われている

そのため どの企業も宇宙開発研究などに余念が無い

そうならば起こるのが 他企業への妨害工作である

今回 ロウの任務はまさにそれ

工員侵入のための陽動作戦 ロウは囮

小さくコールサイン

「ん？」

それが続けて3回鳴った

「やっとかよ」

3回のコール ミッション開始の合図

「それじゃ 始めるぞサラ！」

『おー！！』

「今日のお客さんは何人だ？」

『えと えと』

サラはあたふたと思いを巡らせようととして

だがうまく考えがまとめられずに焦る焦る

彼女が考えているうちにも目の前のゲートは開いていく

「早くしないと時間切れになっちまうぞー」

『えと…じゃ…50体!』

「OK! それじゃパーティーを始めつか!」

目の前の重い鉄扉が左右に開ききる

まずは8体 パーティーの幕が上がる

中にいたのは8体のハミングバード

ハチドリの名の通り 機銃を備えた小さな浮遊型の戦闘メカ

突然の来客に驚く風でもなく 愛想も無しに出迎える

挨拶もそこそこに ハミングバードが緑の機体に照準を向ける

左からミサイル2発 右からパルスビーム3発

前方からパルスビーム1発 そしてミサイル2発

ロウを囲む檻 一斉射撃が緑の機体に放たれる

「遅すぎるんだよ!」

だが そんな猛攻を物ともせず回避していく

右のパルスビームを前に出ながら躲し

左のミサイルと前方のミサイル計4発

その軌道が見えるかの様に脇を走り抜けていく

最後のパルスビームは僅かに機体を横に移動させるだけ

それでも立て続けに攻撃を仕掛けるハミングバード

その全てを躲しながら 右手のハンドロケット (EWG・HC

- RAW) で

次々とハミングバードを落としていく

まずは8体 被弾一つもなく余裕で破壊する

「時間はまだまだあるんだ 思いつきり楽しもうや!!」

彼らのパーティーはまだ 始まったばかり

いつしか戦場は ダンスホールと化していた

敵が下がる ローウが前に出る 右に動く 左に動く

激しい動きではない 軽いステップを踏むかのように

機体を少しだけ動かす その側を弾丸が軌跡を残す

敵の攻撃は一切当たらない まるで弾の方が避けているかのよう

「49…50…51！ サラ！ 50体突破しちゃったぞ！」

隙間なく撃ち込まれる弾丸を前に だがこの余裕

「えー外れたの？ まだまだいる？」

「ああ まだまだまだ！」

敵にハンドロケットの狙いを定め 引き金を引く

だが カチンと小さく音を響かせるだけだった

「…あっちゃあ…弾切れかよ」

ハンドロケットは仕事が済んだとばかりに眠りにつく

「まあいいか まだこれがあるしな！」

突如 機体の左腕から金色の光が浮かび上がる

ブレード？ ELS - 7880？ 最強の名を冠する刃

気合一閃

手近な敵を薙ぐ 斬ると同時に前方へブーストダッシュ

敵の弾丸を縫いながら 次々と斬り裂く 突く 薙ぐ

そして いつまでも続くと思われた長い喧燥が 唐突に沈黙

「あれ？」

敵の気配が無い

「おいおい打ち止めかよ」

ロウは物足りなさそうに小さく舌打ちをした

「しょうがねえ サラ パーティーはお開きだ」

『はい お疲れ様！』

サラは満面の笑顔で答える ロウはこれがたまらなく好きだった

だからだろう 彼はこの瞬間を邪魔されるのを心底嫌っていた

ロウは 顔はサラに向けたまま 緑の機体は背後に向けてブレードを振る

『ん？ どうかしたのかな？』

「いんや……」

そして 小さな爆発

「気の利かないヤツにオシオキ」

それが最後の1体 場に静けさが戻る

「さて それじゃ始めますか」

異様な粘りを伴う糸

扉 壁 天井 床

そこかしこに張り巡らされている

それをブレードで斬り裂きながら先へ進む

重い鉄扉が左右に開き まずは4体

ギギギギギツと 聞き慣れたくない鳴き声

思わず鳥肌が立つ 虫は本当に苦手だ

それがこのサイズで動きまわるなんて

悪夢過ぎて泣きたくなる

待ってましたとばかりに虫は口を開く

異常に熱い粘液 火傷じゃ済まない温度

吐かせる前にブーストダツシュ

2匹 3匹 4匹 立て続けに 斬り倒す

暫くしてニーナが『あつ』と眩きを洩らした

「どうかした？ 何か異常でもあつたか？」

『いえ 何もありません』

「……解つた」

少し腑に落ちないが まあ進めば解る事

そう思つたのが間違いだつたと思ひ知らされる

暫く進むとACが通れる程の大穴が床に開いていた

不自然な開き方 恐らく虫に壊されたんだらう

「ニーナ この下にもいるのか？」

『いるんじゃないですか？』

まだ勘でやっているのか？

「ニーナ 一つ聞いても良いか？」

『何でしょ？』

「君は…勘は良い方なのか？」

何故無言？ そして何故目を逸らす

『良い方だと思えます』

「……じゃあ聞きたいんだけど」

『はい』

「この下にいるのは何だと思っ？」

『どっという事ですか？』

「とてつもなく嫌な予感がする」

さつきから鳥肌が収まらない

出来るならこのまま家に帰りたい

そう言いかけて だが出たのは虫だった

足元の穴から虫が一匹飛び出す

無気味な音を立てて粘液を吐き散らす

躲し切れずに幾らかを浴びる

機体温度が一気に跳ね上がる

たった数滴 その数滴でこの熱さ

「気味悪いし熱いし……最悪だ」

一気に近づくと そのままブレードを突き立てる

虫は気味の悪い断末魔を残して爆発した

「生体兵器に叫び声って……誰が得するんだよ……」

今日で本格的に虫が嫌いになった

「もしかしてこいつら 無限増殖するのか？」

その異変に気づいたのは今頃だった

いくら倒しても倒しても虫は湧いて出る

どう考えても増えたとしか思えない

『それはそうでしょうね』

いや そうでしょうね じゃなくて……

「……ニーナ 何か隠してないか？」

『別に？』

心外ですね みたいか感じに答えてるけど

どの口でそんな事言ってるんだこの女

「グダグダ考えてても仕方ないか……」

意を決して足元の大穴に飛び込む

穴は大して深くはなく　すぐに底が見える

シヨックに備え　地に降り立つ　迎撃体勢に入る

さて　まずは手近な虫から地道に……

「なに　あれ……？」

正面には崩れかけたガラス張りの部屋

その部屋の中に”何か”が蠢いていた

目を凝らす　機体のカメラをズームにして……

「ニーナ！　何だあのでっかいモノ！？」

そこにいたのはどう見てもACの2倍以上あるノミ

鎮座しながらこちらを　ジッと見つめていた

『生体兵器です』

見れば分かるよそんなこと

あんな虫がいてたまるか

「……帰っても良いか？」

『無理です』

「何故？」

『監督局からの通達です』

「何って？」

『破壊しろ だそうです』

「……行ってきます」

『はい』

虫に嫌われるような事 何かしたっけ？

前回の仕事を棚に上げ そんな事を考える

溜息 そして鳥肌を抱えながらレバーを握る

まずは前方へブーストダツター……

動くよりも先に ノミの親玉が動いた

いきなり異常な速度で粘液を吐き散らす

たまらず右へ平行にブーストダツシユ

嫌な音を立てながら 粘液が機体にまとわりつく

「なんだこれ?!」

粘液を受けるたびに機体の動きが重くなる

機体の関節部が固まってるように動かなくなる

このままじゃヤバイ 止まったらヤラれる

相手を中心に円を描くように右へ移動する

途中 転がっていた生体兵器を斬り倒す

それを見たノミの親玉が特大の奇声を上げた

……斬らなきゃ良かったか？

目の前で我が子を斬り殺されて怒りに吼える

粘液がさらに激しく撒き散らされる

粘液を受けすぎたのか機体が動かなくなる

そこに立て続けに吐かれる粘性の液体

グチャグチャと嫌な音が響く 耳に残る

機体のダメージよりも精神ダメージの方がデカイ

「イイ加減にしろ！！」

勢いよくブレードを振る 体の周りの粘膜を斬る

ペダルを全開で踏み込む ブースターが火を噴く

その炎で脚部を覆い隠す 紫の膜を焼き尽くす

左腕と脚部が自由になる だが頭部は膜に覆われたまま

前が見えない それでも構わない

「さつき見た 配置は憶えた」

なら見えなくとも動ける

目を瞑る 頭の中の映像に集中する

OBを点火する 一気に弾ける

敵の懐の中 ブレードを構えたまま突っ込む

ノミが悲鳴を上げる そして重い何かが落ちる音

視認はできないが 恐らく斬りつけたのは頭部 直撃の筈

背後から液を撒き散らす音が聞える 小型の生体兵器か？

左後ろ 右後ろ 右斜め前

音だけを頼りに今の状況を推察する 囲まれた……？

突如奇妙な音が混じりだす まるで火炎放射器を吐き出すような音

音源は前方 ノミの親玉から？ 何だ！？

咄嗟に左斜め前に出る 次に聞いたものは

後ろにいたと思われる小型タイプの断末魔

また同じ音 そして機体のカメラの視界が開けた

「今度は溶解液でも吐いたのか?!」

頭部の粘膜が徐々に溶け出し

次にカメラが溶け出していた

このままじゃ後数分で また暗闇に戻る

その前に ケリをつけさせてもらおう

左に移動する 移動しながらノミの胴体を斬り裂く

ノミは悲鳴を上げる 怒りに燃えた目でこちらを睨む

どうやら胴体を斬りつけただけじゃダメージにならないらしい

「だっ たらー……」

ノミは溶解液を吐き出そうと顔を上げる　そして口を開く

今まさに液を吐き出そうとするその一瞬　その間隙

「もらった！」

ノミの口の中へと青い刃を突き立てる

腕が熔けていく音　頭を貫く青い刃

そのまま真横にブレードを振り払う

後ろに跳んでノミとの距離をとる

吐き散らされる粘液　そして虫の悲鳴

周りにいる自分の子供達を溶かしていく

のたうち回るノミのマザータイプに近寄る

機体は粘液を受ける度に溶けて煙を上げる

ノミの顔は苦しみに悶えている様に歪んでいた

徐に右手を　MOONLIGHTを構える　蒼い刃を形作る

腕を引き絞る　弓を射るような所作

そして一気にマザータイプの頭を突き刺す

体が跳ねる 2度 3度 痙攣するように

「おやすみ」

人に造られた苦しみから解放する

それが唯一 彼女にしてやれる事

目頭を抑え 軽くマッサージをする

少し根を詰めすぎたか 時間の感覚が狂う

? A I N ? の事を調べ始めて三日が経った

自分のあらゆる過去を掘り返し

現在起きている事件を引っ張り出す

似たような話しは数多く見つかる

? 消されたレイヴン?

? 神出鬼没の A C ?

? キナ臭い噂を持つオペレーター?

似たような話しは幾つか目にする

だが どれも信憑性に欠けるものばかり

つまり見るべき情報は皆無

「また…か」

あの時と同じ 何一つ解らない

解る事はただ一つ　？A I N？は消した……

いや　それも解ったと思い込んでいたにすぎない

確かに自分の手で消した　そう　思っていた

だが　また聞かされたあの名前　？A I N？

今日何度目かの溜息　苛立ちが込み上げる

もう一度だ…もう一度初めから洗い直してみよう

端末に手を伸ばしかけた時　視界の端で光が明滅

携帯端末が小さくコールサインを鳴らす

『クライツ　良い？』

ミコトからの通信　声を聞くのは久しぶりだ

『依頼が来てるんだけど　どうする？』

依頼…正直今はあまり乗り気ではなかったが

現状が煮詰まりきっているのも事実だった

だからだろう　内容だけでも聞いておこうと思ったのは

ミコトに短く「内容は？」と問う

『政府要人の暗殺』

聞いた内容に 僅かに落胆にも似た感情を覚える
よりによって暗殺 しかも？政府？の要人か…と

『忙しいなら断るけど……』

ミコトは沈黙を否定と捕えたのだろう

「……いや 受けよう」

それに僅かに首を振り 承諾の返答をする
気乗りはしないが断るわけにはいかない

本当の依頼主が それを許さないだろう

なにより 今ここで彼らとは手を切れない

『解った』

名ばかりの依頼主に返事を返しているのだろう

ミコトがコンソールのキーを叩く音が聞える

『OK 貴方に依頼を頼むそうよ』

「場所は？」

『バルバスシティ』

「了解」

清々しい朝 何故か少し嬉しくなる

ソファから身を起こし 背伸びをする

こんな日はノンビリするのもいいかも

何せこの頃 ヘヴィな仕事しかしていないし

労働基準法はどっかに吹っ飛んでしまったらしい

まあ 原因は二丁ナにあるんだけどね

他のレイヴンも こんなに働き者なのかねえ……

不意に テーブルに置いた携帯端末が鳴る

『おはようございます レイヴン』

……こんな時間に珍しい

『ああ おはよう……どうした？』

朝から美人の声を聞けるのは嬉しいが

それが二ーナだと何故か背筋が寒くなる

どうせなら笑顔で明るくモーニングコールを……

そんなくだらない要求と願望と爽やかな筈の朝が

『以前貴方が救出した要人が 殺されました』

二ーナのそのセリフで 一転した

「仕事が無駄になったってことか？ 詳細は？」

『2日前 特別列車で地下鉄を移動中

突然ACに襲撃され 殺されました』

端的かつ要点のみを伝えてくる

「地下鉄？」

『はい 政府専用の高速鉄道路だそうです』

政府専用……？ 待てそれは変だ あの辺は警備が特に厳重の筈

ドヤ顔でそう地球政府の連中が公言していたと記憶してたけど……

「あの警備システムを突破したヤツがいるのか？」

『はい』

「それは凄いな……」

その割に周りが騒いでいないところを見ると

もしかして政府連中しか知らないのか？

それはつまり よほど静かに潜ったってことじゃないか？

だとしたら 世の中色々なヤツがいるもんだ……

「それで？」

続きが有る筈だ こんな事のためにニーナが顔を出す筈が無い

『仕事です』

ノンビリする予定が消える 最早その気も失せていた

もしかしたら その潜入したヤツに会えるかもしれない

「だろうな それで仕事の内容は？」

『輸送列車の護衛です』

ニーナとの会話が途切れる

頭の中が？マークで埋まっていた

「破壊されたんじゃないのか？」

『それは特別列車です』

ニーナの声はいつも通り冷たいが

言葉尻に 僅かに苛立ちが見えた

ニーナは端的に無駄なく要点のみを答えるせい

話しが見えてこないことが多々ある その度に質問をして

その度にニーナは苛つのだ 理不尽じゃないか？ それ？

まあ そんなことはいつもの事なので 構わず続ける

「ああ なるほど…で？ 何で護衛が必要なんだ？」

『テロリストが輸送列車の襲撃を予定しているそうです』

「無茶をする そのレイヴンと同じ事をやるつもりか？」

よほど腕に自信が有るのか もしくはよほど馬鹿なのか

『いえ 実行されれば成功は約束されています』

あまりに断言したニーナの言葉に また？マークを浮かべる

「何でそう言いきれるんだ？」

『トンネル内部に 警備システムの欠点が存在していたそうです』

「トンネル？ どのの？」

『グレートンネル』

「よく見つけたな その欠点ってヤツ」

『侵入したレイヴンが仕事を行った場所ですから』

「なるほどね……じゃあ そのトンネル内部で護衛すれば良いのか？」

『その通りです』

「解った それで？ どこに向かえば良いんだ？」

『バルバスシティ』

「了解」

時刻 14:15

ザーム砂漠

旧操車場

所狭しと並び置かれる列車の残骸

火が入らなくなって既に久しい

この忘れられた列車の墓場が

今は 激しい戦場と化していた

緑の機体が金色のブレードを振る

目標を正確過ぎるほど正確に斬撃

「次！」

四方八方から撃ち込まれる パルスキャノン 連装バルカン

それらをことごとく躲しながら 一体 また一体と破壊する

「これで一丁上がりっ！」

最後の一体をブレードで破壊すると 男は「楽勝」と笑った

「終わった終わった」

『お疲れさまあ！』

「おう！ お疲れ！」

サラが笑顔で労う それにロウは笑顔で答えた

『結構早かったね』

「そりゃな まあMTだしな」

物足りねえな とロウは余裕を見せていた

そこに小さくコールサインが鳴る

『今回はご苦労だった 良い演習だったよ 協力に感謝する』

今まで戦っていた相手 インディーズからの通信だった

「あいよーご苦労さん」

一拍の間を開けてから 依頼主は『それにしても……』と

呆れた様な もしくは驚いた風な口調でロウに問い掛ける

『レイヴンは皆 こんなにも凄いのか?』

依頼主の男は 周りに散らばる残骸を見渡した後で

緑の機体に目を移す その機体は傷一つ付いていなかった

だからこそその驚嘆 レイヴンは敵に回すもんじゃないな

少なくともこのレイヴンは……と 男は自分に言い聞かせた

『さあ? 人によるんじゃないの?』

当の本人は いったて軽く肩を竦めて返事をするだけだった

そして再び間が空いた 依頼主の男は押し黙る

「……………なあ もう用がねえなら帰るけど？」

仕事終わったし サラと飯でも食いに行こうかな

そんな事を考え だがすぐに 金が無えと心で泣いていた

『……………一つ依頼を頼まれてはくれないか？』

ガツクリ落とした肩を 顔と一緒に上げるロウ

「依頼？」

『ああ当初の予定では我々が行う筈だったのだが……………』

と自分達の乗っていたMTと 周囲の残骸を見渡してから

『君に頼んだ方が良さそうだ』

どうしようかとロウは思案していた

仕事は予想よりも早く終わったし

帰っても金は無いし情けないし

「んー…一応聞くけど内容は？」

『政府の輸送列車を襲撃して欲しい』

「政府ねえ……」

こりゃまた大それた相手に喧嘩売る気だねえ

などと　ロウは他人ごとのように考えていた

次に只今の残金と相談する……までも無かった

「分かった　受けたるよ」

『ありがたい　助かる』

楽そうな仕事で　実入りも良さそうだと

ロウは今夜の晩ご飯は何にしようかと

終わったつもりで考えていた

「で　場所は？」

『バルバスシティ』

「了解」

時刻 17:50

バルバスシティ

グレートトンネル内部

甲高い警笛がトンネル内部に響く

光が徐々に近づいて来る

レールを擦る鈍い音を立て

高速で脇を抜けていく

「目標を確認 任務を開始する」

ニーナが無表情で『はい』と答えた

車両が中央まで来た所で追走を始める

今ままだ 何事も無さそうだ

甲高い警笛が遠ざかっていく

光も徐々に遠ざかっていく

レールを擦る鈍い音も消える

「ヤベエ！」

別の路線から侵入したロウ

インディーズの計画通りに侵入し

だが 予想外に入り組んだ内部に迷っていた

おかげで列車の頭から叩く作戦が早くも潰える

「……まあいつか どつちにしろ同じだし」

列車の最後尾に向け ブーストダッシュを開始する

列車と追走して 暫く経った

「……来ないな？」

あまりに何事もなく進みすぎて拍子抜け

これなら別に護衛なんていらなかったんじゃない……

『そう思いますか？』

だが ニーナからの返答には

たつぷりと何かが含んでいた

「ん？ どういう意……」

最後まで言わせてもらえなかった

突然の爆発音が鳴り響く 音は…最後尾？！

その場で急ブレーキ 反転からのダツシュ

「油断した！」

ここまで接近されて気づかないなんて

いや ニーナは気づいてたんだろうな

さっきの返答を思い出して舌を打つ

程なくして 緑のACが姿を現した

少し出遅れたけど ようやく最後尾が見えた

「いたいた」

EWG・HCC・RAW
ハンドロケット を構え 狙いを定める

「そいじゃ 始めますか！」

1発2発3発 立て続けにロケット弾を叩きこむ

爆発のあとに鉄屑が完成　まずは最後尾を頂き

「楽勝楽勝」

ちやっちやと終わらせよう　敵は時間だけみてえだし

『またそうやって油断する…痛い目見るよ!』

サラが怒りながらも心配そうに忠告をくれた

それに軽く手を振りながら答えてやる

「ダイジョブだって」

どうせ破壊するだけ　ほら　次の車両が見えた

これもさつきと同じ　ハンドロケットで狙って撃つだけ

「……………あん?」

2両目を破壊した所で気付く　なんかいる

『どっしたの?』

不安そうなサラの顔

大丈夫だって言ってるのに…………

思わず苦笑い

「サラ…勘良くなってきたな」

『えっ?』

「お出ましたよ」

そこには 闇色をしたACが佇んでいた

「ニーナ 気付いてたか?」

『さあ?』

いつもの様に アツサリはぐらかされる

でも 今回は完璧に自分の油断 何も言えない

奴も気付いたようだ 右手の狙いを列車から外す

緑の機体はゆっくりと ハンドロケットを向けてきた

『敵が 来たの?』

「みてえだな でもよ……」

『どづかしたの?』

「武器 持ってねえ 何だありゃ?」

いきなり現れた黒のACは 素手で仁王立ち

『どうするの?』

「無視」

『えっ?』

「どうもしねえ 無視だ無視」

棒立ちのカカシなんざ相手にしてる暇なんて無え

スピードをゆるめずそのまま突っ込む

2門のハンドロケットを黒のACに向ける

撃つ 同時に怯んだ隙を突いて脇を抜ける

「じゃあな!!」

雑魚を無視して一気に次の車両を指す

2発のロケット弾が迫る それを横に移動して回避する

間髪入れずそれに続いて緑のACも突っ込んできた

だが何もせずにそのまま脇を抜けて走り去る

「これってもしかして……」

『無視されましたね』

「やっぱりそう思うっ？」

『そつとしか思えませんか？』

無視された　こんなアクションは初めてだ

思わず笑いが漏れる　面白い　コイツは面白い

「上等だ！」

レバーを握りペダルを踏み込む

反転し緑のACに向かってブーストダッシュ

暫くして　列車に向けてハンドロケットを構える緑の姿

「させるかよ！」

さっきのお返し　ブレードを緑の機体の右手に叩き込む

遙か後方に置いてけぼりを食らわせた筈の黒いACが

突然真横に姿を見せた　同時に青い光が右手に向けて振り下ろされる

「チキシヨウ！！」

列車に向けて構えていたハンドロケットを 咄嗟に外側に外す

今まで右手が在った空間を 青い光が軌跡を描きながら斬り裂く

「あつぶねえ！ ブレード持ってたのかよ！」

思わず冷や汗が出る 後少し遅かったら右手は吹っ飛んでた

『だから油断するなって言ったじゃないか！』

サラがぼれ見たことかと怒ってた

少しだけ涙目になっていたのを見て

チクリと胸が痛む 自分に嫌悪する

「わりいわりい…でも もう油断はねえよ」

機体を黒のACに向ける ハンドロケットを構える

今度のは威嚇じゃない 本気で弾を当てに行く

相手の腕を斬り落とした そう思ったのだが

「おっ！ やる！」

ブレードは予想に反して何も無い空間を斬り裂く

そして 緑のACはついに立ち止まり 臨戦態勢に入る

そしてハンドロケットが火を吹いた

銃口の位置から弾の飛んでくる方向を読んで回避

動きを止めずに相手に迫る 緑のACの懐に入る

「もらった!」

ブレードを水平に薙ぎ払う

「なっ?!」

あの間合いで躲した?!

「それなら!」

左腕を構える 青い光が刃を形成する

振る と見せかけてそのまま緑のACの脇を抜ける

フェイントに引っかけた緑のACは動きが止まる

このまま後ろを取る このタイミングなら取れる!!

だがその期待は裏切られた それも予想もしない行動で

緑のACが前を向いたまま後ろに勢い良く跳んできた

あまりに突然の体当たり　左腕は振る直前で封じられた

「そう来るか!?!」

相手に押される形で後方にブーストダッシュ

ブレーキをかけようにも機体差がありすぎる

こっちはスピード重視の軽量機体

対して向こうはオールラウンドの中量機体

パワーに差があり動きは止まらないだろう

一瞬の思考　だが相手は待ってくれない

目の前に黒い穴が2つ開いた

それがハンドロケットだと気づくのに数秒かかる

緑のACは後ろ向きのまま腕を折り曲げて構える

「クソ!」

どうする?!　ロケットを掴む?　いや　それよりも……

ディスプレイに手を伸ばす　OBの表示を叩く

力の収束が機体の背部で始まる

OBが発動 勢いを全て緑の機体に叩きつける
相手は体勢を崩す

緑の腕があらぬ方を向く

ロケット弾は天井に着弾

そしてOBを切って急ブレーキ

前のめりになつた緑の機体

その後頭部に目掛けてブレードを引き絞る

「マジかよ!?!」

躲すにしろハンドロケットを掴むにしろ

それより早くロケット弾を叩きこむ自信があつた

それがどうだ いきなりとんでもねえ衝撃

おかげでロケット弾は狙い外れて天井焦がすだけ

「なんだよコイツ?!?!」

今まで数人しか在つた事が無い人種

「最ツ高じゃねえか!?!」

体勢を立て直す 後ろをチラッと見る

青い光が後頭部を貫こうと迫る

でも 俺は見た 青い軌跡の道筋を

黒のACが青いブレードを振る それより早く

その光が？通るであろう軌跡？から機体を退ける

「？見え？てんだよ！」

機体をしゃがませ 続けざまにバックブロー

金色のブレードを黒いACの脚に叩きこむ

刺したと思った瞬間しゃがまれた そして見えた金色の光

奴のブレードが予想以上の威力を見せる

だが 長さが短かったおかげでギリギリ掠める程度

もしこれが？LS・MOONLIGHT？だったら……

背筋に寒いものが走る コイツ…強いー…

お互い後ろに跳んで距離を離す

正面から睨み合う

『ロウさん……』

心配そうなの……いや 少し脅えたような顔

「ワリイなサラ 少しの間 通信はOFFだ」

『あっ……うん……』

寂しそうなサラの顔に 別な女の顔が重なる

ごめん……ごめん……

胸の痛みと そして怒りが込み上げる

それを抑えて笑顔を作る モニターに触れる

「サラ」

『……なに？』

「また後でな」

『絶対……だよ？』

「モチロン」

スイッチを切る サラが消える 回線を閉じる

こっから先は 俺の顔なんて見せられねえ

またサラが 脅えるといけないから……

「……さあ！ トコトン戦ろつや！！」

緑の機体の背部 巨大なブースターに力の収束が見えた

OBが来る それを確信して迎撃の体勢に入る

来るのはブレードか？ それともハンドロケットか？

緑の機体が弾丸となって襲いかかる

右手は上げていない ならブレードか！

「もらった！」

相手の懐にわざと入りタイミングをずらしてやる

緑の左手が振られるより早く ブレードを振り上げる

「かかった！！」

OBが発動する 黒のAC目掛けて突っ込む

だがそれより早く黒のACが突っ込んでくる

それを待ってた OBを切ってさらにタイミングを外す

相手がこちらのブレードの範囲内に踏み込む

その瞬間を逃さずヤツのコア目掛けてブレードを横に薙ぐ！

「これで 終しまいだ！！」

金色のブレードが黒のコア目掛けて横に薙ぐ

青のブレードが緑の頭部目掛けて斬り降ろす

二人の獣の雄叫びが構内に木霊する

青い光が頭部ごと縦に真っ二つにする

金色の光がコアを横に真っ二つにする

ー… 筈だった

「なにが起きた？！」

「なんだよおいつ？！」

唐突に 2つのブレードが沈黙する 光が消える

同時に聞えてきたのは 機械仕掛けの女性の声

【作戦終了 戦闘システム 解除】

【作戦失敗 戦闘システム 解除】

気づかぬ2人を止める声 そして力の剥奪

常に冷静な女性が 二匹の獣をあやし 宥める

『それで?』

うっ……

『護衛対象を放っておいて』

無感情 などと言つもんじゃない

それは蔑み混じりの冷えた声

『いつまで遊んでいるつもりですか?』

はっきり言おう 怖い メチャクチャ怖い

「……すみません」

情けないと思うだろうが怖いものは怖い

『これだから貴方達は……』

仕方ないじゃないか こんな事はそうは無い

アイツみたいに強い奴とやれる機会なんて

「ニーナもレイヴンになれば解るって」

『解りたくもありません』

「ソウデスカ」

大きさに肩を竦めてみせる

『ですが 結果的に仕事は無事終わりました』

？結果的に？をことさら強調するニーナ

皮肉のつもりか 無表情だが効果は抜群だ

ニーナが口を開く度に寿命が縮まる思いをする

溜息を吐いて「帰るか」と独りごちる

まあ アイツが帰してくれればの話だが

「サラ」

モニターを軽く指で叩きながらサラを呼ぶ

「サラ 終わったぞ」

映しだされたサラは 俯いていた

「サラちゃん？」

ゆっくりとサラは顔を上げ

ジツと俺を見つめている

目は赤く腫れていた

また 顔を伏せる

『…………あ…う』

声を押し殺し 小さく嗚咽を漏らす

「…………わりい」

ただ 謝ることしか出来なかった

小さな掌で サラは涙を拭う

『…………ロウさん』

ぽつりと 小さな声で呼ばれる

『…………だろ』

そして小さく 本当に小さく何かを呟いた

「わりい…聞えなかった 今なんて言った？」

モニターに顔を近づける サラの声に耳をそばだてる

だがサラは何も答えない 代わりに気のせいだろうか

息を大きく吸い込むような動作をしたような……

『心配かけさせるなって言ってるだろ！！！』

いきなり耳元で声が弾ける

『どれ…ボクが…どれだけ…心配…したと…』

そしてサラの感情が爆発した

安心した反動か 今度は大声を上げて泣き出す

顔を涙でぐしゃぐしゃにしながら泣きじゃくる

そんなサラの泣き顔に 別の女の顔が重なる

ごめん…ごめん…

手を伸ばそうとして 触れられない事に苛立つ

「ごめんな……」

いつもそうだ…いつだってそうだ…

不意に コールサインが鳴いた

こんな時に鬱陶しい

状況ってのを考えてくれ

回線を切ろうと手を伸ばす

それよりも早く その？誰か？は現れた

『初めまして 私……』

サラの隣に映し出された誰かさんは

黒髪ロングでかなり綺麗系の女だった

氷みたいに冷たいヤツ

それが その女の第一印象だった

突然現れて 勝手に自己紹介を始めて そして途中で止めた

多分 サラが泣いてるからだろう そりゃ誰だって驚くだろうさ

だが この女の態度は違った 驚きなんてもんじゃ無かった

『……この声』

女はそう言つと サラの泣き声に耳をそばだてている

『……ロウさんの……ばかあ……』

その サラの一言が引き金だった 女の顔色が変わる

『その声は サラですか？』

何でコイツがサラの事を知ってんだ？

『…あ…ニーナあ』

サラがニーナと呼んだ女

よく見るとサラと同じ制服を着ていた

てことは コイツも同じオペレーター…

待てよ？ ニーナ？ 確か前に聞いたような聞かないような……？

『サラ どうしたのですか？ 何故泣いているのですか？』

表情は無い でも優しい声でサラに問い掛ける

『…ロウさん…が…』

サラはニーナに答えようとして

また涙が溢れる 大泣きを始める

せつかく落ち着いてきたつてのに

なんだよ このニーナって女……？！

『……………貴方が』

突然の悪寒

背筋に冷や汗が流れ止まらない

コックピットの温度が確実に下がった

『サラを泣かせたのですね……？』

鳥肌が収まんねえ　なんだこれ？！

足がガクガクと震えるのを必死に抑える

この感覚は知ってる　これって……殺気？！

『覚悟は出来ていますね？』

……こ……恐えええええ！！

殺る気まんまんじゃねーか！この女！！

恐怖で声が出ない　頭の中では警報が鳴り響く

「逃げろ！　殺られるぞ！！」と言う声が聞こえた

ガチガチと鳴る歯を噛み締め　負けじと女に言い返してみた

「……モ……モニター越しで……何が出来るってんだよ……」

女の目が細くなっただ様に見えた

一拍置いて　コンソールを叩き始める

途端 コックピットがブラックアウト

次いで機体が微塵も動かなくなった

「ちよー！！ ええ？！ お前何しやがった？！」

レバーを動かそうがペダルを踏もうが何も反応が無い

いや ジェネレーターが動き始めた 回復したのか？！

だが違った 機体は動かないままジェネレーターだけがフル回転

コックピットの中にエネルギー切れの警告音が鳴り響く

普通ならオーバーヒートする筈なのに ジェネレーターは回り続ける

強引にリミット・カットさせられたような感じ

これって このままじゃ爆発するんじゃない？！…

頭の中に不吉な単語が浮かび上がる

まさか これってこの女がやってんのか！？

ニーナに向けて 止める！ と叫ぶより先に

『ちが…っ…』

サラが小さく小さく呟いた

普通では聞き逃す様な小さな声を

だがニーナは聞きとつたらしい

今までの喧騒が嘘の様に静まった

『何が違うのですか？』

殺気は俺に向けたまま

声は優しくサラに向ける

なんつー器用な女だよ

『ロウ…さんが…しん…心配…で…』

ニーナは得心したのか 雰囲気が緩んでいくのが分かった

『そういう事ですか 解りました』

オレに向けられた殺気は 完全に消えている

助かった 心底そう思う 助かった……

『ですが………』

ユダンタイテキ 脳裏に浮かぶ

『もし またサラを泣かせたら 解っていますね？』

油断した その心の隙間に思いつきり殺気を乗せた声
首を縦に振る それがオレの出来る唯一の返答だった

『改めまして』

ニーナは何事も無かったかのように切り出した

『ニーナと申します』

画面越しに深々と頭を下げる

『…あ…あ…解ってるけど…』

まだ何かあんのかよ…

正直 もう消えて欲しかった

『ニーナあ…どうかしたのお?』

サラはまだ少し声を詰まらせている

『ええ 少しお聞きしたい事があります』

それにニーナは 優しく答えていた

『聞きたいこと?』

『はい 彼を少しお借りしても宜しいですか?』

……借りるって……2人つきりつすか？！

「イヤ……」

イヤだ そう言おうとして だが声が出せない

この時 選択肢なんざ無いんだなと 痛感した

だが サラが『うう』と 妙な唸り声を上げる

恐らく威嚇してるつもりなんだろう

でもどうみても子猫レベルの迫力

それでもオレにとっちゃ助け舟だ

イイぞ！ サラ！ 頑張れ！！

『大丈夫ですよ』

そんなサラを 気のせいかな微笑んだ様に見えるニーナが

『サラから彼を取るような真似はしませんから』

そんな事を口にした 途端 サラがアタフタと

意味不明な事を口走りながら下を向く 耳が赤い

照れたサラとは対照的に 目を細めて満足気なニーナ

ああ 分かった ニーナって女 コイツはドSだ
『なんでしたら』

十分に何かを堪能したんだろう 少し間を置いてから

『サラも一緒に構いませんよ』

ニーナは提案をする オレは心の底から安堵のため息

『いい…の？』

『勿論』

サラは満面の笑みを浮かべていた

ニーナも 無表情だが気持ち優しげな表情

ここだけ見ると ほのぼのした光景なのにな……

『それではお聞きします』

ニーナはまた 勝手に話しを進める

オレの返事なんざ微塵も聞きやしねえ

『貴方は火星に行った事がありますか？』

…はあ？…火星？

『いや ねえけど…?』

こっちは地球産のレイヴンだ 火星なんざ行った事も無い

『そうですか』

それだけだった また深々と頭を下げる

『ありがとうございます』

「え? それだけ?」

何事が起きるのかと身構えてただけにかなり拍子抜け

「フーン…まあ良いけどよ なんでそんなこ…」

最後まで言えなかった

ニーナの冷めた瞳に睨まれる

好奇心は獣を殺す 深追いするな

「ナンデモアリマセン」

『そうですか』

何なんだ…この女…

『お話し終わってた?』

その場の雰囲気をぶち壊してくれるサラの声

『はい』

ニーナの切り替えの早さも半端ない

『だったらさ ニーナのレイヴン見せて!』

はあ? サラの言ったことに首を捻る

『別に構いませんが 見ても面白くありませんよ?』

それに承諾するニーナもニーナだろ

つか誰だか知らんけど見世物になってるし

可哀相な奴もいるもんだ 同情しちまうよ

『でもさニーナ 今忙しいんじゃない?』

サラがそのレイヴンの事を気にかけているんだろっ

だがニーナは『いえ』と言った後『暇ですよ』と答えた

サラが『そうなの?』と聞くと『ええ』とニーナが答え

『目の前にいますから』とニーナは目の前で動かない

今まで戦っていた黒いACを指して言った

思わず吹き出す 飛んだ睡にサラが非難の声を上げた

…ええ…ニーナのレイヴンって…アイツかよ…

…何か…可哀想なやつだな…

そんなオレを置いてけぼりにして

ニーナはサラに回線の開け方を教えていた

でも相手は機械音痴で名高いあのサラさんだ

懇切丁寧に教えてもらったって出来る筈もねえ

案の定 回線は開けなかつたみたいだ

サラが『ごめんね』と言い落ち込むが

ニーナが『構いませんよ』って答え

コンソールを何度か叩いた

そしてモニターに見知らぬ男が一人

「……………なに？」

ヒドイマヌケ面を晒してた

コックピットで背伸び　右手が何かのスイッチを押す
だが　機体は何故か　うんともすんとも動かなかつた
一体どうなつてんだ？

こんな事はある得ない……いや　一回だけあつた

ニーナが前に似たようなことをやってみせた

いつもの質問に答えなかつたレイヴンに確か……

そこでハツとする　一つの結論に思い至る

もしかして　またニーナの奴がやらかした？

問い質そうと通信回線を開こうと手を伸ばし……

『あつ！　通じたよ！！』

「……………なに？」

突然　元気の良い可愛らしい女の子が映し出される

「えっ……………と？」

理由も分からないが　何故か少女に睨まれてる

『……………』

ああ 見つめてたのね しかし口に出す辺り…残念な子？

『ニーナあ！ ニーナが言ってた変な人ってこの人でしょ？』

元気な事は良いことだ だがそのセリフは頂けない

失礼極まりない事を少女は全力で叫び倒した

いきなり何だ！ そう怒ってやるうとして

『そうです』

ニーナの即答 遠慮無し 迷い無し

自分でも分かるほどの乾いた笑い声

涙を流していないのが 不思議なくらいだ

「…で？ 誰？」

溜め息混じりに聞いてみる もう疲れた……

『え？ あっ！ 初めまして！ ボクはサラだよ！』

元気な自己紹介に苦笑い 彼女はサラちゃんと言っらしい

……ん？ そこで少しばかりの違和感 今ボクって言った？

「もしかして 男の子？」

だとしたら驚きだ　こんな可愛い子が男の子だなんて

『なっ?!　チガウよ!　ボクは女だよ!』

途端に怒った…んだよな?　顔で抗議の声を上げる

『うう』と唸りながら　もしかしてこれ　威嚇?

「そっだよな　男にしちゃ可愛すぎると思った」

何気ないセリフに　だがサラちゃんは驚いて

『あっあっ』と慌てふためきテレてみせる

「普通……だ」

その　あまりにも普通の反応に　少し本気で驚く

何だろう　同じ女性でなんでこんなに違うんだろう

ニーナにこの可愛げが少しでもあれば……

『ほっ』

体が跳ねる　なんて勘の良い女

ニーナから全力で目を背ける

通信を切ろうと回線OFFを押す

だが回線が切れない それでも押す

『普通では無いとは どう言う感じなのでしょうね？』

まだ諦めない 2秒頑張つて 3秒後に頭を下げた

「勘弁して下さい」

「おっ！ 映つた映つた」

モニターに 見知らぬ男が映つた

「よっ！アンタ強えな」

見だ目軽そうな 話し方さらに軽い男

首を捻る 誰だ コイツ……？

心当たりを思い出してみるが いない

「でよ コツチも聞きてえ事があんだけど」

突然現れて 突然質問つてのはどうなんだそれ？

「いやいや って言うか 誰？」

モニターの向こうの男が変な顔をした

数秒して 男は「ああ」と頷いて

「お前の目の前にいんだろ」

と モニター越しに手を振った

目の前？ そりゃ目の前にいるだろうさ

お前 モニターに映ってるんだから……

「ってもしかして 緑の？」

目の前で動かない緑のACを指さす

「そうそうー！」

あーなるほど 確かに目の前だ なるほど……

……ああ それでか 今全部理解した 少しコイツに同情する

コイツはどうやらニーナを怒らせたんだろう だから機体を止められた

そのとばっちりを何故か食ったのか どうりで動かないわけだ

「なあ 質問してイイ？」

物思いに耽っていると 男が遠慮がちに聞いてくる

「ん？ ああ答えられる事なら良いけど……」

すると男は「サンキュ」と言って話しを切り出す

「アンタ苦労してるだろ？」

「ああ！」

近年稀に見る全力の返答だったと自負する

自分で驚くほどの早さで即答していた

男は苦笑を浮かべながら 小さな声で

「なあ ニーナってナニモンだよ？」

ニーナ…初対面の奴にこれだけ言われるって お前ナニした？

「知らん」

付き合いは長いが 実は彼女のことは何も知らない

火星帰りの強いレイヴンを探してるらしい

それくらいしか知らない

「それじゃあ……」

なおも何か聞こうとする男に 無言で掌を見せる

そしてやはり無言で首を振る　もう止めとけ…と

ニーナの視線が痛い　あれはかなり怒ってる

付き合いが長いからもう1つだけ分かる

そろそろニーナが切れる

「あ…あ…そうするわ」

瞬時に察してくれた　頭の回転は早いようだ

むしろなんでこの男がこんなに怯えてるのか

ニーナ　確実に何かやらかしたな……

溜息を一つ　コイツに同情を禁じ得ない

「じゃあ本題　アンタ白いAC見た事ねえか？」

それがコイツの本当に聞きたかったことらしい

だが白いACって　そんなのその辺にゴロゴロいるだろ

実際ホワイトカラーはメジャーな方だと思う

なんて言うか　無難な配色ってイメージがある

「誰か探してるのか？　他に何か特徴は？」

さすがに白いACってだけじゃ分からない

せめてもう少し詳しく知りたい

「あとは……そう グレネードランチャー……だったと思う」

「思う？ はつきり解らないとか？」

何だろう？ 途端に歯切れが悪くなる

自分で聞いておきながら 酷く言いにくそう

男は「ああ わりいな」とだけ答えた

「他には？」

「あとは確か レーザーライフル」

不確定要素多数 これじゃ解らない

そんな武装した奴なんて結構いるだろう

……いや そうでもないか？

「探してるのは2脚のAC？」

試しに聞くと 男は「そうだ」と答えた

2脚の機体にグレネードなんて武装

強化人間くらいしかする筈がない

なら結構絞られるかもしれない

後はもう一つだけ聞きたい

「じゃ そいつは強い？」

「……強い…強かった」

これだけはハッキリと答えた

男は悔しさを抑えるように

少し歯を食いしばっていた

「そうか…だったら多分会った事は無い…と思う」

「ホントに？」

「ああ お前に？強い？って言わせるくらいだ 会ってたら覚えてるさ」

それは偽りも世辞でもない本心だった だが男は

「……オレに……ね……」

少し自嘲気味に呟いた 訳ありってやつかな

深くは聞かない　それがレイヴン同士の不文律

男は大きく息を吸い込んで　そして吐いた

気持ちを入れ替えるように

「それじゃ　そろそろ行くわ」

緑の機体がのそりと動き出す

どうやらニーナが開放してくれたらしい

「ん？　ああ……」

試しにレバーを動かすと　右手が動いた

「今度会ったら決着つけようぜ！」

「ああ　そうだな」

「んじゃ！　またな！」

そう言つと　緑の機体は走りだす

「そつだ」

何かを思い出したのか　急に立ち止まり振り返る

「？　ロウ？　これがオレの名前　憶えといてくれ」

「……解った」

「そんじゃ！」

緑の機体は今度こそ トンネルの奥へと姿を消した

「慌ただしい奴だったな」

『そうですね』

短い会話 ニーナの様子を見る

口を開こうとして それを躊躇う

今度もまた ニーナは聞いたのだろうか

貴方は火星に行きましたか と

「どうだった？ 聞いたんだろ？」

少しの沈黙 ニーナは視線を外した

関係ないって言われるかな？

と覚悟した だが答えは違った

『収穫はありません』

「そう……か」

『はい』

この時のニーナには 何も言わない方が良い

彼女は 下手な気休めと慰めを嫌う

だから いつも通りに振る舞う

「それじゃ 帰るか」

それに いつも通りにニーナは答える

『はい お疲れ様でした レイヴン』

『あっ！ そうだ！』

何かを思い出したように サラが声を上げる

「どうした？」

『えっと……ね』

「ん？」

サラは満面の笑顔でいつもの言葉を口にした

『お疲れさま！』

だからオレも いつも通りにサラに答える

「……ああ お疲れさん」

仕事が終わって次の日の朝

「わりっ 失敗した」

ロウの第一声は 謝罪から始まった

相手は今回の依頼人である？インディーズ？の男

音声のみの会話 しかし 少なからず相手の動揺は伝わる

「何かあったのか？」

列車を破壊するだけの仕事

彼ほどの実力があれば簡単だろう

相手にどんな迎撃の準備があるうとも

そうは思っていただけに 男のショックは大きかった

「ああ…ちょっと…な」

ロウが言い淀む それを男は訝しむ

「何があった？」

言いにくそうにロウは唸りながら

少し間を開けて 渋々口を開いた

「まあ ちょっと相手が悪かったってとこだ」

ロウは怒声か罵声を覚悟していた

失敗したんだから仕方無い と

「……君ほどのレイヴンでも 勝てなかったのか？」

ロウの予想に反して 男は静かな声だった

それにロウは 少し強がりも含めて言った

「負けてもいねえけどな」

何事かを思案しているのだろう

男は何も語ることも無く沈黙

そして 「分かった」 と口を開く

「君で勝てないのなら 我々が行っていたら無駄死にだったな……」

ロウは少なからず驚いていた

その辺の政府の指揮官よりも聡明な男の

少ない情報から推察する能力に

「事情は解った 破壊できなかったのは残念だが仕方あるまい」
なるほどな と ロウは得心した

この男に他の奴がついていくのも領ける

「今回の仕事の分 報酬は支払えないが 良いな？」

「ああ こつちも貰う気はねえし」

懐は かなり厳しいことになっているが……

「それでは 今度何かあった時 その時は頼む」

「解った そんな時はきっちりやるよ」

まあ アイツが出てこなきゃな

ロウは心の中でそうつけ加えた

「それじゃ」

「あいよ」

「やっぱり失敗の報告は疲れるわ……」

シートに深く身を沈め 現在の残金を思い出す

「どうすっかな……」

一応約束の分は用意できている

でも それを支払った後は……

「まっいつか」

それ以上考えてたって仕方ねえ

前向きに考えよう 何とかなるさ

モニターを指で軽く叩く

「サラ 終わったぞ」

映ったサラの顔を見て 心臓が跳ねる

とても悲しそうな 泣きそうな顔をしていた

「……？ どした？」

泣いている様に見えたけど 違った

それは酷く心配してくれてたんだろう

『……怒られた？』

そんな幼い気遣いに 笑みが漏れる

サラがすぐ傍にいらなくて良かった

こんな顔をされると我慢できるか疑わしい

「んにゃ大丈夫だった 怒られてねえよ」

出来るだけ優しく 安心させるように答える

『ホントに?』

「ああ ホント」

『……良かったあ』

そこでようやくいつもの笑顔を見せる

前言撤回 傍にいないのが残念だ

『それじゃこの後どうするの? お金無いでしょ?』

「ありゃ バレバレっすか?」

『当然だよ! だから無駄遣いはするなって言ってるのに!』

すっかりいつもの調子に戻っている 少し笑いがこみ上げる

『こらあ! なに笑ってるんだよ!』

「わりいわりい」

拗ねた顔を見せるサラ　それがまた可笑しい

『んもあ…それで？　どうするのさ？』

まだ少し怒っているのだろう　語気が強い

「んー…どうすっかなあ…」

何も考えてないのがバレバレだったんだろっな

サラは見かねて大声を上げた　コンソールを叩きながら

『どうするのさー！　このままじゃご飯も食べられないんでしょー！？』

「あーと…まあ…少しくらいならダイジヨブ」

『ダイジヨブ　じゃなーいー！！　別なお仕事探すのー！！』

サラの目が怒りに燃えていた　心配性だなあ

と思う反面　本気で心配してくれのが嬉しい

「わ…解った…解った！　でもその前にな」

と言いかけて　サラに睨まれる

『その前に……なに？』

静かに問い掛けてくる　二、三程では無いにしろ　少し怖い

「いや……ちょっと寄りてえ所が……」

『……また無駄遣いするんじゃないよね？』

「ハハハ ソンナマサカ」

サラってホント 勘が良くなってきたなあ

思わず笑い声も乾いてしまう

『ホントお？』

「ホントだって」

？無駄？遣いじゃねえし まあ遣うけど

『……ん 解った』

一応 納得してくれたいらしい まだ疑ってるようにも見えるけど

『じゃ それが終わったらちゃんとお仕事探すんだよ！』

「はいよ」

そして進路を真南へ ？コルナートベイシティ？へと向ける

『だから！ 僚機は破壊しないで下さい！……』

「いや それは解ってるんだけど……」

目の前に迫る 人型の青いMT

それを破壊するために左腕を振る

『ああ！ もぉ！！ だから！ ? D - 1? は破壊しないで言
ってるでしょ!!』

あのなあ……

「だったら！ 斬ろうって時に横から割り込んで来るを止めてくれ
!!」

『それを何とかするのがレイヴンでしょ!!』

滅茶苦茶過ぎるよ主任さん……

時刻 17:56 ? アイレットシティ?

ジオ・マトリクス社所有 地下兵器試験場

周りには 倉庫のような 建物オブジェが並ぶ 灰色の空間

その中央に建造された建物 記録監視塔から女性の怒鳴り声が響く

以前 支援兵器のテストと言うことで

試作支援兵器? D - 1? との戦闘を依頼された

今回は 新たに造られた支援兵器？D - 2？とのテスト戦闘

『あと1機しか残っていません！ 早く援護に向かってください！』

要するに D - 1を守りながらD - 2を破壊しなきゃいけない

そんな理不尽があるか？ 支援機を支援しなきゃいけないなんて……

そうこうやってるうちに お守りの対象であるD - 1は残り1機

……D - 2も1機しか残っていないんだけどね

レーダに2つの光点が映っていた

一つはD - 1 もう一つはD - 2

近くにいたのは良い具合にD - 2だけだった

どうやらD - 1の姿は見えない 丁度良い

D - 2も気づいてすぐ右腕を上げる？プラズマライフル？

先程から あちらこちらで咆哮を上げていた閃光

その砲口が光を吐き出した

1発目 迫り来る閃光を右に回避

D - 2は発射と同時に空中に跳ぶ

そのまま空中で旋回し 右手に回り込まれる

2発目 D-2に突っ込みながらそれを躲す

背後の建物 監視塔に直撃し光が消える

D-2は地面に着地し 距離を離そうと機動

2つの破裂音 D-2がミサイルを放つ

目の前のディスプレイを押す

機体の背部に力の収束

? OVERD BOOST?

離れたD-2との距離を一気に詰める

左腕を引き絞る 弓を射る様に強く

D-2が下がる それを追う そして捕らえた

拳を叩きつけるようにブレードを叩きこむ

「ちょちょちょ……!!」

不意に 何かが飛び込む陰が視界に入った

ブレーキを掛けようと頑張ったが無理だった

D - 2よりも細長い 奇妙な物体が横から割り込む

それはD - 1だった 2つの兵器を串刺しにしてしまった

呆然としてしまう 開いた口が塞がらない

『……………レイヴン?』

「……………ナニカ?」

『今回の分の仕事料は 無しです』

「なんで?」

『なんで? なんて言って言いました……………?』

うわっ 声が震えてるよ

『援護しなきゃいけない僚機を全て破壊して! よく言えますね!』

『!』

「いや! ちょっと待ってって! あれはどう見ても……………」

『聞く耳は持ちません! 明日こそはちゃんとやってください!』

そう言い残すと彼女……………兵器開発女性主任の? イリス? は帰って行った

今回の依頼の期限は1週間 今度こそ泊まり込みでテストを行うらしい

今日も午前10:40から開始して 今やつと終了する

1週間 その間ずっとこんな事を繰り返すのか……？

少しゲンナリしながら 自分に割り当てられた巢へと戻る

? コルナートベイシティ?

南には? ファーレーン海岸? その向こうには? オルコット海? が広がる

この都市では 海上の輸送路を巡り数々の企業が

文字通り水面下で争いを繰り広げていると言う

それだけに この都市に拠点を置く企業も多く 争いも絶えない

しかし皮肉にも 企業が多ければ人も集まるもので 人の住む都市も存在する

? コルナートベイシティ? の主要交通路? フォードブリッジ? を挟み

企業側の多く点在する場所と 都市部側とを分け隔て繋いでいる

? フォードブリッジ? この橋の中ほどにある灯台

これは海を見守るためにあるのが普通だが

監督局側が企業側を見張るためにある　とも言われている

その逆でもある　とも言われているが　真相の程は定かではない

どちらにせよ　都市は港町らしく　それなりの繁栄を見せている

都市の中心部にある　商店街アーケードの多い区域

ここは常に人で溢れている

しかし　それを嫌うかのように離れた

さらに奥　人の波から外れた場所

薄暗い　地下に続く階段の前に　ロウは立っていた

1歩1歩階段を降りるたびに　足音が反響する

そして　目の前には扉　押して開けるタイプ

そこには　白く細長いプラスチックの板に黒い文字で一言

【CLOSE】

愛想も素っ気も無い文字　閉店を示す言葉が飾られている

それに構わず扉を押し開ける

錆びついた少し耳障りな甲高い音

扉をくぐると 室内は少し薄暗い

準備中だから と言う訳ではなさそうだ

人との関わりを極力避けた結果のようにも見える

「字 読めなかったのか？ まだ準備中だ」

カウンターから男の声が発せられた

不躰で 小馬鹿にしたようなセリフ

それを口ウは鼻で笑い飛ばす

仕方ねーなあ そんな顔していた

「ったく…マスター相変わらず口わりいな」

少し苦笑いを浮かべながら 店の主人に話し掛ける

「あん…？ ああ…口ウか…オメエには言われたかねえよ」

端から見れば どちらもどっちと言う気もしないではない

「良い？ 都合わりいなら出直すけど？」

「ああ 入れ どうせもう少して店開きだ」

開店と言いながら客を追い返そうとする男を見て

ロウは心のなかで 相変わらずだな と笑っていた

「サンキュ」

そう言うとカウンターの席にロウは陣取る

マスターは背中を見せたまま グラスを磨いていた

「マスター 髪切らねえの？」

「切らねえの」

「あつそ」

髪を後ろで束ねているせいで マスターが動く度に

馬の尻尾みてえにピコピコと動く それを眺める

相変わらず背高えな つかガタイ良すぎだよな

とても酒場のマスターには見えねえ……

まあ 本人曰く 「昔はレイヴンだった」 らしい

それがホントかどうかは知らない 教えてくれない

でも 武器やACに精通しているし あながち嘘じゃないのかも

「飲むか？」

マスターは空のグラスを目の前に置いて

いつもの酒のボトルを手にしていた

「あーと…じゃ一杯だけ」

「ん」

琥珀色の液体が グラスの半分まで注がれる

注がれたグラスを手に取り 喉に流し込む

冷たいはずの液体が 胃を熱くする

「ふう……」

一息つく マスターはグラス磨きに戻っていた

「ところで アレは？」

手でグラスを弄びながら マスターに向かって問いかける

「ああ…調べといた…けど今回は高えぞ？」

カウンターの下から5枚の紙を取り出す

一応 60000cは用意してあるけど……

「いくら？」

恐る恐る聞いてみる

「50000」

「ゲッ！ ちょっと高すぎんじゃない？」

「なら 止めとくか？」

……むう…人の足元見やがって……

「……いや…良い…全部買う」

あと10000は残るし…何とかなる…かな？

「毎度 先に振り込んでくれ」

「あいよ」

携帯端末を取り出して マスター宛てに振り込む

にしても50000って……法外すぎじゃない？

「……OK 確認した」

オレが金を振り込んだのを確認すると

マスターは手に持った紙を投げてよこす

「それが今回の分」

「サンキュ」

それを受け取り 内容を確認していく

どれも同じようなACが載せられている

「……なあ なんで今回こんなに高けえの？」

何の気もなしにそんな問いかけをする

「ん？ そりやお前 白いACだけ探すってのもなかなか骨なんだぞ？」

マスターが 文句あんのかと威圧する

それに首を軽くすくめる ふざけんなよ

「骨…ねえ…最高の情報屋がよく言うよ」

このマスターは 酒場の主人と言う顔の他に

様々な情報を金で売る と言う商売

簡単に言えば 情報屋の顔も持っている

巷じゃこの人以上に物知ってる人はいねえ

なんて言われてるほどだ 骨な事あるかよ

「最高ね…アイツがいなけりゃ正解だ」

だがマスターは独り言のようにそう呟いた

「アイツって？ マスターの他にいんの？」

そいつは驚きだ マスターと同じくらい

でなきや それ以上の情報屋なんていんのかよ

「ああ…一人な」

「ふーん どんなヤツ？」

「知りたいか？」

「え？ ああ…まあ…」

本心ではすげえ聞きたい

でも何か癪に障るから

まあね なんて答えてみせる

それを見抜いてかマスター

少し意地悪そうな顔をして

「じゃ 1000で良いぞ」

なんて事を言いやがった

だから正直に言いたくねえんだ

「げっ！ 金とんの?!」

そんなオレの反応を見て

マスターが大声で笑った

「冗談だ ジョーダン」

「ったく 口もわるけりや性格もわりいな……」

「まあそう拗ねるな 教えたるから」

そしてマスターは 自分が認める男の事を話し始めた

「そいつの名前は？クライツ？ 俺の知る限りで最高の情報屋」

「Doppelste」

「クライツ……ね」

「多分 まだレイヴンをやってる筈だ」

と あのマスターが憶測で物を言った

「多分?! 解んねえの?!」

まさかマスターから多分なんて聞けるなんて

「ああ ヤツの事知る人間は少ねえだろうな」

「なんで？ 見たことあるヤツいんだろ？」

「いや あるのはほんの少しの噂くらいのもんだ」

「噂？ どんな？」

「どれもくだらねえもんばっかりさ」

と言いながら マスターは指折り数えて挙げていく

「例えば 10機のAC相手に1機でやっちまった とか」

「はあ？」

「他には この世に知らない事はねえだの」

「なんじゃそりゃ？」

「実は人間じゃない なんてのもあるな」

「宇宙人か何かか？ そいつ」

マスターと二人で笑う

噂にしたって酷すぎだろ

「だから言っただろ くだらねえ噂だつて」

「納得 確かにくだらねえわ」

それを鼻で笑い飛ばして ふと思った

それってつまり……

「つて事は マスターも見たことねえ訳だ」

「まあな だから最高には程遠いんだよ」

マスターは少し苦笑いを漏らす

「残念だな そいつを見れたら一番になれるのにな」

「違いねえ」

この世に残る最後の珍獣かつつの

マスターと二人でもう一度笑った

「……そう言えば これも噂だけどな」

マスターが 今度は神妙な顔をする

思わずオレも 前のめりで話しを聞く

「一度見た つてヤツの話だが」

「ん？」

あれ？ 見た奴いないのに 今度は見た奴出て来やがった

この噂も信憑性は低そうだ 話半分に聞いたところ

グラスを煽る手が だが マスターのセリフで止まった

「クライツの乗っていた機体の色な それが 白だって話があるんだ」

一瞬で その場を緊張感が包む

「………確証は？」

知らずに 胸が高鳴っていた

もしかしたら 当たりか…と

「ゼロ」

「なんだよ！ 思いっきり期待しちまったじゃねえか！」

思わずグラスを叩きつけてしまっていた

幸い割れはしなかったが中身が飛び出る

「だから言ったたる 噂だって」

それをマスターが手ぬぐいで拭いてくれた

「はぁ…そうだよなぁ…」

その場で突っ伏してしまふ 酒がマズイ

沈黙

時計の音だけが やけに高く聞こえる

程なくして マスターが口を開いた

「……まだ 探すのか？」

「ん？」

グラスを傾ける マスターは話しを続ける

「あれから5年だ もう死んでるとは思わねえのか？」

グラスの中の氷が溶け カランと音を鳴らした

マスターの問いには 何も答える気は無い

「……諦める訳はねえ…か」

『わりいなマスター…こればっかりは…な…』

少しだけ グラスを握る手に力がこもる

沈黙

「……まっ おめえが来ればこっちも儲かるしな」

雰囲気や和らげるために わざとマスターが軽口を叩いた

「だからって ぼられんのは勘弁だけだな」

それは合図 重たい話はそこでオシマイ

だからオレも イツモノ口調でそう返した

話が一区切りした時 ちょうど店の扉が開いた

「いらっしやい」

一人の男が 店の中へと入ってきた

そのまま真っ直ぐカウンターに座る

マスターはその男の顔を目に入れた

どうやら知り合いじゃないらしい

……これは後で知ることになるんだけど

マスターはこの時？最高？を手に入っていた

「いらつしゃい」

マスターは 入ってきた客に「注文は？」と聞いた

男は何も答えず 目だけで周りを見渡していた

恐らく観察 その身のこなしは一般人のそれじゃない

マスターと並んでも遜色ない位に背は高い ガタイも良い

ただ 何というか酷く印象が薄い 短く刈り込んだ髪

割りと整った顔立ち それなのに 明日には忘れそうな……

不意に そいつと目が合った んで 考えが180度変わった

ああ コイツは印象が薄いんじゃない 機械的なんだ

冷たすぎる目 まるで感情ってヤツが感じられなかった

この印象 最近どっかで会った事あったような……

少し考えて ああ 思い出した アイツだあの女

ニーナにそっくりだ まるで氷みたいに無感情 無機質 無表情

あの女を男にしたら まさにこんな感じになるんじゃないかな
だとしたら 世の中おっかねえヤツが多いんだな

カウンターに座った客に マスターはもう一度 「注文は？」 と
聞いた

それに男は静かな声で 「酒はいらない」 と答えた

「うちにミルクはねえよ」 マスターはグラスを磨きながら言った

「それもいらぬ」 男は返した 「ただ 苦い酒を売ってくれ
甘いやつだ」

それを聞いて マスターは何も言わずに親指で店の奥を示す

「ついて来い」 無言の仕種シエスチャー

意味を解した男は マスターと共に店の奥へと消える

それを横目で眺めながら グラスの酒を一口呷る

今のやり取りが情報を売ってくれて意味らしい

マスター曰く 知識つてのは時に甘く 時にエグいくらい苦いらしい

何でも知ってるマスターが言うんだ 他の誰が言うよりも そうな
んだらうさ

「それで？」

店の奥は何も無い殺風景な部屋だった

ただ 端末が一台置かれているだけ

第一声 店の主は客に注文を聞いた

「ナニを調べれば良い？」

無駄口はいらないとばかりに

淡々と仕事の打ち合わせに入る

客の男は懐から 一枚の紙を取り出す

それを店の主に手渡した 「これを」

店の主は何も言わずに手紙を受け取り 中身を見る

そこにはたった3文字 単語が並んでいるだけだった

「……コレのナニを調べれば良い？」

「全て」

客の答えは至ってシンプルだった

それに店の主は首を縦に振った

「期限は？ 早い方が良いのか？」

客の男はそこで少し思案していた

だがそれもほんの数瞬の事だった

「出来るだけ早く」

「分かった」

店の主は客の男に向かって掌を見せる

「前金で5000」

客の男は頷くと 懐から携帯端末を取り出す

店の主が提示した額を 口座に振り込んだ

「確認した」

それを店の主が確認する 契約は結ばれた

「今日から開始する」

店の主の言葉に 客の男は静かに頷いた

「そつだ コイツはどうする？」

折りたたまれた手紙を客に見せる

男は無言で店の主に手を差し出した

それを渡す 店の主も必要とはしていなかった

たった三文字の単語 それは誰だって覚えられる

「1週間後 また来てくれ」

客の男は頷いて そして部屋を後にした

オレの後ろをさっきの男が通りすぎる

入り口の耳障りな音で鳴く扉を開ける

男が店から出ると入れ違いに

マスターが部屋の奥から戻ってきた

「忙しくなりそう?」

「まあ 多分な」

「店は? 閉める?」

「いや もう暫く開けとく」

「そっか」

「お前はどうすんだ? もう少し飲んでくか?」

グラスを弄びながら考える

もう少し飲んで行こうか……

でも結局 オレは首を横に振った

サラの顔が頭に浮かんじまったから

「んー 今日の良いや 帰るわ」

サラが待つてる筈だしとは

口には出さないでおいた

「そうか」

マスターが短く答える 少し笑んでいた

多分 マスターにはお見通しなんだろうな

ちょっと浮かんだ悔しさを 残った酒で流し込んだ

支払いを済ませようとしたら マスターが言った 「おごりだよ」

「ありがと ご馳走さま」 オレは軽く手を振って出口に向かう

「ああ そうだ」

後ろから呼び止める声がかかる

「ん？ なに？」

マスターの方へ振り返る

「言い忘れてたけど 最後の紙に載ってるヤツな」

「紙？ ああ さっきの」

オレはさっき受け取った情報の五枚目を見る

そこには2脚の中量機体 勿論カラーリングは白

随分エネルギー装備に偏った機体が載っていた

「これがなに？ どうかした？」

その紙をマスターに振ってみせる

「ソイツ 機体変えたらしい」

紙を振っていた腕が止まる

「マスター……そう言うことは早く言ってくれよ！」

思わず脱力 そして全力でマスターにぶー垂れる

「わりいわりい で確か……」

マスターは思い出そうと顎に手を当てて考えるポーズ

「そうだ バルバスシティだ」

「バルバスシティ？ それがなにさ？」

「そこに出るんだと」

いや 出るって言われても 幽霊じゃねえんだから

「なんで？」

あのなあ そんな顔を見せるマスター

「レイヴンが出るついたら ？奪う??守る??壊す?? つまり仕事」

「ああ なるほどね」

仕事……って言うかバルバスシティって……

「なんだかなあ……」

マスターが不思議そうにオレの顔を眺めていた

そりゃそうだ さぞかしゲンナリした顔してたと思う

「どうした？ 溜息ついて？」

「いやあ……昨日までさ バルバスシティにいたのにまたかと思って
な」

マスターは笑って「お疲れさん」と言った それに答える「どーも」

「今度来た時にでも ゆっくり飲ましてもらおうわ」

右手を軽く上げて「ほんじゃ」と別れのアイサツ

「ああ またな」 マスターはグラスを手にして答えた

入り口の扉が甲高い音で鳴いた

外の空気が心地良い

入り口の階段に足を踏み出す

1歩上った所で動きを止めた

扉の方を振り返り プレートを手取る

【CLOSE】

終了の言葉が簡潔に綴られている

軽く苦笑い そのプレートを裏返す

【OPEN】

さて 明日からまた 忙しくなりそうだ

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7562y/>

ARMORED CORE2 ANOTHER AGE - A・I・N -

2011年12月11日02時47分発行